



ふつう語訳 源氏物語2

～ 帚木 ～

渡 司

源氏が、まだ近衛の中将であった頃の話だ――。

世間では「光源氏」と敬意を持って呼ばれている一方、浮世を流す男として、様々な噂が立っていた。

一人の女性に歌を送ると、それがただ単に挨拶程度の歌であっても、すぐに世間の噂を呼び、人に伝わるたびに話が大きくなっていった。

実際のところ、源氏は大変「世の評判」というものを憚り、常日頃から「真面目に」と心掛けていたから、色めいた風情漂う話など、そうそうあるはずがなかった。

十七歳の男児としては頑すぎるほどで、

「某の物語で有名な『交野の少将』に笑われてしまうかな」

と、源氏自身も思えるほどであった。

葵の上との夫婦生活も六年目となっていたが、二人の間では打ち解けた夫婦らしい会話もない。

近頃では、明るい光の下、葵の上の笑顔どころか姿さえも御簾や几帳に隔てられ、見ることもなかった。

宮中だけが居心地良く、左大臣邸には、たまに通うだけとなっていた。

「――春日野の若紫の摺り衣

しのぶ乱れの限り知られず――

春日野の若い紫草で摺った忍摺りの乱れのように

あなたを思う私の心は限り知れぬほどの乱れ様——

って、伊勢物語にもあるけどさ、光君が『忍の乱れ』でも起こすような女が、他にもできなかったんじゃないの？」

などと左大臣方には疑う者もいたが、源氏にはそんなふうな浮気っぽい、ありふれた行き当たりばったりの浮気というのは、どうにも性が合わない。

あちらこちらに次々と——ということは決してなかった。

ただ、ひたむきに、いつもとは違って悩み多い恋を心に思い詰めるというような変わったところがあって、芳しくない行いが無いわけではなかったが——。

——私は——あの人を——。

源氏はその思いを、未だ心に秘めていた。

そんなある日——。

源氏、十七歳の雨多い頃——。

宮中では、帝の凶事の具合が悪く、宮中全体での物忌みが何日も続いていた。

もともと宮中にいることが多い源氏であったが、このようなわけだから普段より一層長く宮中に滞在することになる。

左大臣も、なかなか邸に通うことのない源氏と葵の上との仲が気掛かりで、またそんな源氏を恨めしく思いながらも、長い物忌みでは不便なことも多いだろうと、源氏の様々な身支度を何とか目新しく新調し、源氏の不自由の無いように整える。

また、

「寂しくないように」

ということなのだろうか、源氏の下に子息やその友人たちを向かわせた。

葵の上の実兄で、かつて「蔵人の少将」であった左大臣家の子息は、この数年の間に、蔵人においてはその長たる蔵人「頭」に、近衛においては「中将」にそれぞれ昇進し「頭中将(とうのち

ゆうじょう)」と世間で呼ばれるようになっていた。

頭中将は、宮中でも特に源氏と親しく、他の者たちよりも気安く付き合うことができた。

左大臣の嫡男であり右大臣家の婿でもある頭中将にとって、右大臣の姫たる四の君のいる邸に行くのは、億劫なものであった。

源氏と同様、舅である右大臣の待遇に不満があるのではない。

ただ、権勢門家の姫としての自負や誇りが強すぎる四の君との夫婦仲が芳しくなく、そのせいもあって、頭中将の浮気っぽい道楽とでも言おうか、数知れぬ女性に対する色男ぶりはかなり有名であった。

頭中将は、実家の左大臣家でも自分の部屋の装いをしっかりとし、源氏が来訪するときには、いつも供をし、昼夜を問わず学問、遊びを一緒にしたが、その何気ない知識、遊びにおいても、かの光君を相手にしても何らひけをとらない頭中将は、やはり只者ではない。

世広しと言えども、源氏とここまで親しく、その側にいても全く少しもひけをとらない男は、この人だけであろう。

この二人とも、それぞれ夫婦仲がいいわけではない。

葵の上の実兄である頭中将としては、源氏と葵の上との冷えた関係が気にならないではなかったが、自分の事を考えれば源氏の気持ちも分かるし、人の事を言えた義理もない。

そんなわけであるから、いつも競い合うように親しく一緒にいたので、自然、他人行儀な遠慮もなくなった。心内に思うことも隠さず打ち明ける仲になっている。

(本当にそうかな?)

頭中将は、意地の悪い疑問を自分に投げかけていた。

源氏は、何かを隠している。

日頃からそう感じていた。

——何かは分からない。

まあ、自分にも話さない事なのだから、他の誰も知らないことなのだろう。

他の誰かが知っていて、私が知らないとなれば恨めしくも思うが……。

私が知っても構わないなら、すでに話してくれているはずだし。

誰にも言えぬ恋でもしているんだろうか。

誰にも言えぬ恋か——あの光君のことだからな、ありえないこともない。

誰だ？

かの光君が思いを詰める女など——

そんな女など、宮中にもそうそういるものではないはずだけれど——。

頭中將は、奥底の思いを打ち明けぬ源氏が不思議でならなかった。

帚木(2)

五月雨が、徒然に降り続くうちに日も暮れて、しめやかな宵の雨の中、侍臣の詰所である殿上の間は人も少なく、源氏がいる宿直所も普段より長閑な感じがする。

「人がいないっていうのは、こんなに長閑なものだったかな」

源氏は独り呟くと、明かりを近づけ書物などを読み始めた。

そこにちょうど殿上の間に入ってきた頭中将は、入ってくるなりいきなり、源氏の側に無防備に置いてあった本箱らしきものの中に入っていた、色とりどりの紙に書かれた文を引き出して読もうとした。

「ちょっと、もう。」

入ってくるなりそんなことをするなんて、大人気(おとなげ)ないですよ」

源氏は、優雅な様子で本を読むのをやめ、頭中将から手紙を取り上げると、箱の中に丁寧に戻した。

「何が入っているのか、ちょっと見たかっただけなんだけど」

と言って、頭中将はしきりにそれらの手紙を読みたがる。

源氏はこの有能な年上の友の子供っぽさが、どうにも憎めなかった。

「差し支えないものなら、少しはお見せしますけど……。」

中には貴方に見られては困るものもあるし」

と意味ありげに微笑んで、条件を付けて許した。

「そんなあ。」

そういうふうに貴方が

『人に見られては困る』

って思ってる文こそ、こっちは見たいって思うんだよ。

普通のありふれたものはたいい、私みたいにつまらぬ男でも分相応に女とやりとりして見ることができるのだし。

女たちがそれぞれ、男のことを

『恨めしく思っております』

とかさ

『貴方の訪れを心待ちにしている夕暮れ時に』

みたいなことが書いてあるものこそ、見所があるってものだよ」

と、頭中將は子供っぽい恨み言を言った。

もともと、源氏のことであるから、本当に大切に絶対に人に見せられないような文を、こんなところに置いてあるはずがない。

この箱のなかにある物が、二流に気の置けない——大したことの無い物であると分かっているから、頭中將もこんな無理をいうのだ。

結局、源氏のほうが折れ、名前や場所が分かってしまうようなところはさすがに手で隠しながら、見せることになった。

「へえ、よくもまあ、いろんな手紙を持っておられる」

頭中將は、半ば感心し半ば冷やかしながら、

「これはあの人じゃないの？」

「この字は見たことがあるな。たしか——」

「ああ『桜たち散る』って、こんな言い回しをするのは——あの女でしょ？」

と、その文の主を聞いてくる。

中には言い当てているものもあり、とんでもないいい加減なものもあって可笑しかったが、

「さあ、どうですかね」

と、源氏は言葉少なにして何とか誤魔化した。

一通り読み終わり、源氏が手紙を片付けだしても、未だに頭中將はなんとか名前を言い当てようと頭をひねっている。

「貴方こそ、こんな文を私よりも沢山お持ちでしょう？」

少し見せてよ。

その上で、この箱の中の物も全て快く開いて見せてさしあげますよ」

「光君が御覧になるような価値のあるものなんか、ほとんどないでしょうよ。

貴方に見せられるような、きらびやかな恋愛なんかしたことがないもの。ただね——」

頭中將は、そう言って話を変えた。

「ただね、『これなら大丈夫』とこちらが思えるような、非の打ち所のない女というのはいないものだな、と最近になってようやく分かってきましたよ。

表面だけの繕(つくろ)った風情——そうだな、例えば字をすらすらと書いて、その折々の男が送った歌に相応しい返歌を『心得て』送るといったことなら、それなり人並みにできる女ぐらい多いと思いますけれど。

一つのことに對する技量に注目して女を選ぶとなると『絶対脱落しない』っていうのは結構難しいものでね。

女が、自分が『心得て』できることだけを、各々が得意気に鼻高々になって、他の女を『自分よりも劣る』って勝手に決めつけて馬鹿にする、みたいな笑止千万なことの多いこと、多いこと。

娘に親が付きっ切りに大事にして

『楊家に有り初めて長成れり、養はれて深窓にあれば人未だ識らず』

っていうのを真似してさ、輝かしい将来が約束され、楊貴妃のように深窓のなかで箱入り娘として育てられる間は、その娘の未熟な僅かな才芸を伝え聞いた若い男が、心動かされるということもあるでしょうけどね。

それはそうでしょう？

ただでさえ

『良家のお嬢さんで世間に出ることもない』

というのだけでも『奥ゆかしく』思える上に、人づてに『～が得意らしい』って聞けば、もっと見たい知りたいって私でも思うもの。

本当のところはどれだけ上手いのか、男には分からないしね」

頭中将は、自分や源氏が『良家のお嬢さん』を妻としていることを忘れたかのように話を続けた。

「まあ……女性っていうのは、お姿が可愛らしくておっとりしていて、男もいなくて暇を持て余している若い頃なんかは、ちょっとした芸事でも

『人がやるなら私も』

ということで、心を入れて稽古することもあるって、自然と一芸をなんとか人並みにこなすこともありますよ。

でも、その娘を直接知っている側付きの女房などは、他人に話すときはその他の劣った面を隠すものだし、『それなり』といった程度のことは実際以上に繕って、男に伝えるものです。

男のほうは本当のことを知らないのだから

『それは嘘だ』

って勝手に馬鹿にすることもできない。

だって、本当だったら失礼でしょ？

それに本当であるほうが男には嬉しいことだしね。

ということは、実際のところは自分で確かめるしかない。

『できる人』だということを信じて。

願って。

まあ、『本当かな』と期待をして行って『がっかりしない』っていうことはまずないと思うけどね」

いっきにそう話して息をついた。

今の頭中将の話が、全部が全部というわけではないが、思い当たることもあったのだろう。

源氏は、

「今の話みたいな『未熟な才芸さえもない女』とかってさ、いるものかな？」

と笑った。

「さあね。

ただ、そんな酷い女がいたとしても、どこの誰が人に乗せられて、のこのこ通って行くっていうの。

いくら私でも、ね？

そこまで間が抜けてるつもりはないよ。

それにね、全然取り柄がない駄目な女も『優なり』と思えるほど素晴らしい女っていうのも、どちらも滅多にいるもんじゃない。

女が身分高く生まれると、多くの者にかしづかれ『人目につかぬ点』というのも多くなって、奥ゆかしく思えてしまい、自然と端からは素晴らしく見えるんでしょう。

やっぱ、神秘的っていうのは、一番の魅力だからさ。

でもね、中流の女こそ、それぞれの心、気質、標榜する個性的なところが明瞭で、各々の女一人一人が、他から際立つ点を色々と多く持っているものです。

それより下の身分の女となると、格別気も引かれなくなりますしね」

と、頭中将がいやに詳しく説明してくれるのが、源氏にはおもしろく、意地の悪い質問をしてみたくなる。

「その『身分』というのがね、いまいちさあ、分かりにくくない？」

どういふのを基準に上、中、下というふうに三つの品に分けるんです？

もともとは身分高く生まれながら、今はその身落ちぶれて、位低くなり貧乏しているのと、普通の——例えば四位、五位の者が三位以上の上達部などにまで出世して、得意気に邸を飾りたて人に劣らずっていうのとは、どちらを上で、何方を下にして区別をつけたらいいんですか？」

源氏が頭中将に詰め寄っていると、左の馬の頭、藤式部の丞の二人が、ちょうど物忌みにこもるために参ってきて、話に加わってきた。

左の馬の頭は、左右ある馬寮の左方の長官。

藤式部の丞は、宮中の礼式、文官の勤務評定、選叙を司り、大学寮を管轄する『式部』省の三等官の『丞』で、『藤』の字を姓にもつ名家の出である。

二人とも、頭中将とさほど変わらない年齢でありながら、五位、六位相当の地位についているのだから、かなりの出世株である。

また、二人は当代切っの粹人で、常日頃、女性相手に鍛えられた弁舌をもつ者たちだったので、源氏も頭中将も歓迎し、四人でこの『女の身分』について意見を交わすこととなった。

しかし、頭中将、左の馬の頭、藤式部の丞という、浮名を流すことに関してはあまりにも有名なこの三人が集まっての、しかも女の話であるから、耳をふさぎたくなるような話も多かったが。

源氏は、この年上の友人たちがどんな話をしてくれるのか、正直楽しみだった。

自分のことは話すつもりもないのが、源氏の意地の悪さだ。

馬の頭が、まず話を切り出した。

「いわゆる『成り上がり』でも、それが元々ふさわしい家柄でない者は、世間の人々の心証も、やはり違うものです。

また、もとは高貴な家筋の人でも、権勢門家とのつながりが薄いことで世間を渡る手づるに乏しく、時勢に埋もれ落ちぶれて、名声も地に落ちてしまうと、気位だけ高くてもいろんなことで思い通りにならず、いろいろみっともないことも出てくるでしょうね。

それぞれ判定をつけて、間をとって『中の品』っていうのが妥当だと思いますよ。

国主たる『受領』として中央から離れ、地方国に関わり為政し『中の品』と決まっているような中にも、またいくつも段階があり『中の品でも、かなりな者』というふうに選ぶような御時勢ですからね。

そこいらの上達部より、大弁とか兵衛の督とか蔵人頭とかみたいな『非参議の四位』などのほうが、巷では結構尊敬されて、もともとそれほど家格の低くない者が『あくせくせずに、のんびり』っていう雰囲気なのは、いかにも爽やかですよ。

家のなかに足りないものがたとえあっても、そんなものはほっておいて、その分のお金をけちらず賭けて眩いばかりに育てられた娘で、結構立派に成長しているっていうのも多いです。

その中には宮仕えに入内し『思いもかけない幸福』を手に入れる女もいるんだよ」

「それじゃ結局は、お金があれば『品』なんてものはどうにでもなるって、そういうことですか」

源氏が茶化すと、

「貴方らしくもなく、思いがけない言いようだね。

意地悪だなあ」

と、頭中將は笑った。

「そうだな——」

馬の頭は、あごに手をやり、考えをまとめながら話を再び始めた。

「もともとの家柄と、金や実績で得た現在の信望とが二つとも高く、一致して『やむごとなき』っていう家の姫の、実際の振る舞いや雰囲気は『劣っている』のを知ってしまうと、

(なんでそんなふうになっちゃったの)

ってがっかりするのは、言うまでもないですね。

それに、家柄がそれなりに高い姫君が『優れている』っていうのは当たり前すぎて、逆に...
...ねえ？

『そんなの当然』

って思うと、珍しくとも何ともなくて心も動かされない。

上流中の上流にいる女のことは、誰かさんたちと違って、私には手の届かぬ世界の話ですから、今回は置いておくことにしまして——」

馬の頭がそう言ったのは、上流中の上流に属する源氏や頭中将に対する、彼らしい皮肉だった。
。

「『この世にあり』と人に知られることもなく、寂しく荒れ果て、人の出入りもなく葎が生え絡まって開かなくなってしまった門の中に、思いがけず可愛らしげな女の人が閉じ込められるようにして居るのは、凄く美しく見えるものです。

ほら、

『人気のない陋屋に美女を見つける』

っていうのは昔から定番でしょ？

『どうしてこんな所にこんな美しい人が？』

っていう意外さに、不思議と心留まれるものなんですよ。

例えば、父親が年老い、むさ苦しく太りすぎて、兄の顔は憎らしげでさ、その男家族どもを見ていると

『その家の女じゃ、たかが知れている』

って思ってしまうものですが、その家の閨の奥に、気品高い娘が、何かちょっとしたことで『たしなみ』というものが滲み出るっていうのは、ね？

それがたとえ生半可な才芸だとしても、『思いのほか』じゃないなんてことある？

絶対、意外で趣深いよね。

『完璧な女じゃないとだめ』

っていうならしょうがないけど、普通は結構捨て難いものだよ」

そう言って馬の頭は、藤式部の丞の方を見てにやりと笑う。

藤式部の丞には妹がいて、その妹の美しさが相当なものだという評判があるのを知っていて、馬の頭は話題に出したのだ。

馬の頭がにやりとしたのを見て初めて、藤式部の丞は自分のことを言われているのだと気づき、そっぽを向いてしまった。

「兄の顔は憎らしげ」と言われてむくれた藤式部の丞を見て、馬の頭と頭中將は笑った。

その三人を横目に、源氏は独り思いを巡らす。

(馬の頭はああ言っているけれど、実際はどうなんだろう——。

上流の女でさえ『優れた女』なんかそうはいないもんだ。

『中の品の女』に、そんな素晴らしい女がいるものかな——？)

未だ若い源氏は、「中の品の女」というものを知らない。

普段から内裏に侍ることが多く、巷に広がる噂ほどには、女性遍歴が頭中將たちのように華々

しいわけではない。

上流の女はそれなりに知っている。

が、「中の品の女」などと知り合う機会も、つもりも、今まで無かった。

藤壺に似る人を求めて——同じように高貴な女性を求めて、上流の女ばかりに気を取られていたが——。

（『中の品の女』か——）

源氏の、心の声にも現さぬ、密かな決心だった。

独り物思いに耽る源氏に、頭中將は気付いた。

源氏の、白い下着衣が柔らかく、その上には直衣だけを袴である指貫も履かずに少し乱れ様に着こなし、直衣の襟を止める入紐もささず、枕によりかかって楽な姿勢で寝そべり、燭台の火に浮き立つ姿は、何とも言えず美しい。

「女なら、さぞ……」

と、不埒な考えをして、頭中將は独りほくそ笑む。

（このように美しく、奥ゆかしい媚殿を持ては、親父も気苦労の多いことだろうな……。

葵が気恥ずかしく、頑に心を閉ざすのも分かる気がする——）

頭中將の率直な感想だった。

（この人には『上流中の上流』っていう女でも不十分だろうな——。

その光君の方が思いを寄せる女など——誰だ？）

頭中將は、そんな奥底の見えぬ——見せぬ源氏を、気に入っていた。

いろんな人の身の上話を話に織りまぜながら、馬の頭は話を続けた。

「ただ単に『恋人』として付き合うだけなら、難のある女も少ないでしょうけれど、自分の『妻』として頼りになる人を選ぶとなると、五万という女の中からでもなかなか『これぞ』と決められる人はいないものです。

そうでしょう？

男の社会でも、朝廷に仕え、捗々しい世の礎という人々の場合でも、『真に優れた政治家』となるべき人物の名を挙げるとなると……ね？

そう滅多にいるもんじゃない。

女も男も『本物』を探すのは難しいもんです。

しかし、いくら国政が重要な仕事だとしても、一人や二人で天下の全てを執り行い政事を整える、というわけじゃない。

上の者は下の者に輔けられ、下の者は上の者に従い——というふうに大勢の男が朝廷に仕え、仕事を分担していますから、融通も利き、少しの問題なら何とかなるもんです。

でもね『家庭』というのは、国朝と比べれば余りにも狭いですけど、その主たる妻は一人しかいない。

国政と家事とでは話も違ってくるんです。

不十分ではいけないことや、完璧じゃないといけないことが家庭にだって多いもの。

しかも妻はその家に一人なわけですから、一人でそれらを全て取り仕切らねばならない。

——そ彘にとてとすればかかりかくすれば

あな言ひ知らずあふさきるさに——

っていうふうにね、こうするとああだし、あちらがああなら、こちらがこう——と、人並みな妻としての面を全て持っている十分な女は、少ないもんですよ。

まあ、私も浮気心半分で『女』というものを多く見比べようというんではないですけど。

ただただ頼りになり、家のことを任せられるような女を妻としたいという気持ちで

『おんなじ結婚をするなら、自分があれこれと欠点を矯正しなくてもいい、心に適う女と結婚できぬものか』

などと思っていると、いざ選り初めた女の人とも、なかなか結婚に踏み切れないものですよ。

いざ結婚をしてみて、必ずしも自分の希望が十分に叶ったわけではないけれど

『これも何かの縁だろう』

ということだけで女と別れないでいる男は

『篤実な人柄だ』

と見られるし、男に捨てられない女にしても

『何か取り柄があるからなんだろうな』

と、周りの者は思います。

でも……ねえ？

現実の夫婦を多く見ていると、『及びもつかず偉く立派な夫婦』なんか見たことない。

名門名家の若君方が『この上ない女』を御探しになる御縁組には、ましてどんな女性が御似合いでしょうねえ」

馬の頭が、意味ありげに言った。

『名門名家の若君方』であり『この上ない女』と結婚したはずの源氏と頭中将は、顔を見合わせて苦笑するしかない。

馬の頭は話を続けた。

「容貌がこざれいで、まだ若くて世間の苦勞なんか知らない年頃の女性で、各々が『塵もつかじ』ってな感じで取り繕って、文を書くにもゆったりと構えた様子で言葉を選び、紙への墨の付き方なんかは薄ーくて。

その文を読んだ男なんかは

『心もとなし』

とか思っちゃって

『また一度ははっきりと見たい……』

ってやきもきしてしまう。

ほのかに女の声が聞こえるほどに近寄れるぐらい親しくなっても、こちらの息づかいでもかき消されてしまうような、か細い声を出して、しかも言葉が少ないっていうのは、その女の欠点を巧く隠すもんですね。

そこまでしないと欠点が隠せないんでしょうかね。

優しく女らしい人だと思えば、そういう人に限って必要以上に風情を気にして、一步間違えるとあだっぽくなってしまう。

こういうのが『第一の難』っていうことになるんでしょう。

主婦の仕事にも色々ありますけれど、その中でも特にいい加減にできない夫の世話の面で、『もののあわれ』を重んじ過ぎ、何かちょっとするにも、洒落た事をしようと手を掛けて、風流に気を配りすぎているのは

『そこまでしなくても』

って思えます。

でも、まあ、逆に家事一点張りっていうのも……ねえ。

ほら、肩のここらへんあたりまで垂らす……額髪っていうの？

それを耳の後ろに挟むのは……家事をしていると邪魔になるんでしょうけどさあ。

いま一つ、色気が……ねえ？

夫っていうものはこの御時勢、やはり外で働くことが多いですからね、朝夕の家の出入りにつけて、公私の人々の振る舞いの、善悪いずれのを問わず目で見たり耳で聞いたりした物事も多いでしょ。

そういうことはやっぱり、親しくもない人にわざわざ話すことでもありませんでしょ。

いつも一緒にいて話の分かる妻だからこそ話したいって、普通は思うんですけどねえ。

笑いがこみ上げたり、目頭が熱くなったり、また怒りがこみ上げたりっていう、この心一つには思い余ることが多いのを、いざとなると

『話したって、どうなるんだ』

って思えてくれば、妻に話さずにそっぽ向いて……。

でもやっぱり面白いもんだから

『ああ、そうそう、そういえば……』

みたいに独り言が出てしまって、妻が

『なに？』

って間の抜けた様子でこちらを見上げるのは……もう、ねえ、話にもなんない。

やっぱりあれですね、ただただおっとりしてて、頭の柔らかい柔順な女を、色々はこちらが教授してやって妻に相應しい女性に、『育て上げる』っていうのがいいんでしょうね。

間違っても『欠点を矯正する』というのではないですよ。

最初は心もとなくとも、その女の潜在的な可能性を見いだせるのは心地よいもんですからね。

ただね、難点を言うとするば.....やはりあるんですよ。

ほんとにね、一緒にいてその姿を見ていれば、多少の失敗も、そういう『可愛らしい』という面に免じて許してしまいますけど――

仕事や遊びなんかで家を離れているときに、夫が、家の方でやってほしい頼み事を妻に言いつける時は、それが実務的なことでも情緒的な事でも、妻が自分では何も判断できないで、思慮が浅いのは、やはり男としては口惜しく、『妻が頼りない』っていうのは一番困ったもんですね。

いつもは無愛想で親しみの持てない人が、いざというときにてきぱきと手を尽くしてやり遂げるという時があるものです。

そういう時には、惚れなおしてしまいますよね」

――惚れなおす、か――

源氏は葵の上の様子を思い出しながら、そして頭中将は四の君の高慢な態度を思いだし、苦笑していた。

馬の頭は、その隈ない議論を続けてきたが、きれいな納得のいく結論をまとめかねて、さすがに大きく息をついた。

「今はただ『品』などという身分階級にもよらず――

容貌の善し悪しなんか勿論、問題にならず――

まったく出来が悪くてどうしようもないのは問題外ですけど、性格に振じれたようなところがなければ、ただただ素直で落ちついた趣の女を妻として生涯の頼みと思うことにいたしましょう。

それ以外にたしなみや気の利くようなところがあればあったで

『へえ、そういう面もあったんだ』

と喜ばいいですし。

少しぐらい不十分なところがあっても、無理に

『もっと、ここがこうなら』

などと求めるようなことはよしたほうがいいですね。

心置きなく家を空けられるほどしっかりした女で、変にあれこれと思い詰めるようなところが無いならば、それで、ね。

うわべの『女としての風情』というのは、自然に身についていくものでしょうし。

あ、思い詰めるというので思い出しましたけれども――

しなやかに、いつも物恥ずかしい様子で、夫には――というか、夫の浮気には、普通の女なら恨み言を言うようなことでも、知って知らぬふりをして思い忍ぶ女って、いるじゃないですか。

そういう、表面では平気な顔をして『操づくり』っていうふうにしてる女に限って、言いようがないほど寂しい言の葉を置き手紙に残したり、妙に風情溢れる歌を詠み置き、二人の思い出を忍ばせるような物を『形見』とでも言わんばかりにあからさまに置いていって、奥深い山里や俗世離れした人もいない海辺の里に、いきなり身を隠したりするものです。

子供のころは、そういう『不幸な女の家出話』みたいな物語を、側付きの女房などに聞いて、ほんと、その趣に胸を打たれて

『そういう女の人、心深く考えてのことなんだろうな』

って涙を抑えても流れてしまったものですけど。

今、人並みの大人になってみれば、そういう女の行いは、ほんと軽々しくて

『いかにも』

って感じで嫌でね。

愛情深いに違いない夫を無視してさ。

いくら目の前の現実辛いことがあるとしても、現実から逃れるために逃げ隠れて、夫を心配させ、その愛情の深さを試そうなんていうのは、結局は夫との縁も切れるきっかけとなってしまう。

一生悲しい思いに耽らなければならなくなって、本当に詰まらないことですもの。

『よくぞ心深く決心なされたねえ』

なんていう無責任な周囲の声に煽てられると、女のほうもどんどん自分だけ盛り上がってしま
って、終いには尼になって、悲劇の女を演じてみせる。

自分の境遇に酔ってしまっている。

本人は、そう思い立っているときは

『心澄んで、この世には何の未練も無い』

っていう気持ちなんでしょうけどさあ。

『ええ？そんな悲しいこと……。こんな決心をなさるなんて……』

などと、知り合いの人々が見舞いにきたり、その妻のことを別に嫌いにあったわけではない夫
が妻の出家を聞いて涙を落とせば、召使や古参の女房が、

『ほら、あの旦那様も御心では、未だに愛していらっしゃるのに。その御身を……もったい
ない……』

って、いまさらのように愚痴をこぼす。

女も自分で額髪を掻きさぐってみても、昔に比べて簡素にしているものだから手応えがなく、
今更に俗世から離れた自分の身が心細くなって、顔を顰めては目頭を熱くするものです。

思い忍んでもやはり涙は零れ落ちるもんですから、折々毎に堪えられずいろいろ後悔すること
も多くなるでしょうから、仏様も

『未練がましいな』

って思うんじゃない？

——蓮葉の濁りにしまぬ心もて

何かは露を玉とあざむく——

蓮の葉の泥の濁りにさえも染まらない、その清い心で、

どうやって葉の上にある露を玉だと欺くというの？

っていう歌じゃないけど、そんな生じっかな決意で悟りを目指したら、濁った俗世にいた時よりもかえって、冥土において悪しき地獄、餓鬼、畜生の三道に漂うことになってしまうと思うんだけどなあ。

絶えることのない二人の間の宿世の因縁があって、妻が尼になる前に、夫が連れ戻せたとしてもさあ……

ほら、二人の間にどんなことがあっても、そういう事を二人でやり過ごしていくからこそ、契りや情が深くなるものでしょう？

でもそんな妻の家出みたいなことがあった後じゃ、自分も相手も内心忸怩たるもので、気も許せなくなってしまうではないですか。

それにそもそも、自分には機嫌悪く他の女に心浮かれる夫を恨んで、表立って夫に背くような態度に出るなんてのは馬鹿馬鹿しいでしょ。

たとえ夫の気持ちは他の女に移っているとしても、妻と知り合った時の愛情を夫がもっていれば、妻としての今の地位を持ちつづけることができるでしょうに。

そういう夫の浮気をいちいち咎めるなんていう愚かしい事がきっかけで、夫婦の縁も切れてしまうものです」

馬の頭は、長く話し続けて喉が渴いたのか、白湯を一口ふくんだ。

「全て万事について穏やかに、夫の行為で恨むべきところも

『知っておりますのよ』

ってさ、ほのめかす程度にして。

恨みがましいことも、事を荒立てずにそれとなく言ってくれば、それにつけても男の愛情も深まっていくものです。

多少のことなら、男の浮気心も、妻のほうの出方次第でおさまりようもあるものですから。

逆に、むやみやたらに勝手気ままな夫がするままに放任するのも、端から見れば気楽で可愛らしく見えますが、自然とそういう妻は軽んじられてしまうものです。

『繋いでいない舟が浮かんで漂っている』

っていうのも、実際面白くない。

そうになったらおしまいでしょ？

そう思わない？」

馬の頭がそう言うと、頭中將はいやに頷いている。

頭中将は、座りなおして、自分で納得するように話しました。

「さしずめ、綺麗だとか可愛いとかで気に入っている女に、不義とか無節操の疑いがあるときには大変だろうね。

男のほうに不心得がなくて見過ごすなら、女の不心得を直してでも夫婦生活を続けられないこともないですが、必ずしもそうはうまくいかないものです。

とにかく何方に問題があるにしても、『何か』あったときには気長に我慢するよりほかはないでしょうね」

そう言いながら、

(妹の葵の上と源氏の君にぴったりの話題なのに)

と思ったが、源氏は狸寝入りを決め込んで、議論に加わらないようにしている。

——光君の巧みな言い様を聞いたかったのにな。

どうやって話をまとめただろう——

と、物足りなく、面白くなく感じていた。

馬の頭は弁論博士になりきって話を続ける。

頭中将や藤式部の丞は、その理屈を聞き遂げようと、すっかり話に入り込んで、受け答えしていた。

「いろんなことに比較して考えてみましょうか。

道具を作る指物師で言うと、いろんなものを思いに任せて作りだすのも、その折々の趣味的な道具できちんとした作り方も決まっていない物なら、作り上げたものの洒落た感じなもの、

『へえ、こういうのもありか』

って、まあ、『あり』ですよ。

その時々に合わせて趣向を変えて、今風に作っているのに目移って、趣深く思うものもあるでしょ。

でもね、疎かにできない本当に大切な、家でも

『豪華に』

って思ってる調度品でさ、決まった様式のある物を、難なく作ることになると、やっぱりほんとの名人っていうのは、一味違ったものと一目で分かるものです。

趣味的な道具は、趣味的に作るものだから指物師の腕前が見えにくいものですけど、家の調度品というものは、その出来ばえで腕前が分かるものです。

絵の製作の一切を取り仕切る『絵所』には、名人と呼ばれる人が多いですけど、ほら、絵の輪郭とか構図の線描きをして指示をする『墨がき』っていう偉いさんがいるでしょ。

その墨書きに選ばれるほどの上から下への優劣の違いはすぐ見ただけではわからない。

けれど、人が見たこともない蓬莱の山、荒海の恐ろしい魚の姿、唐国の勇ましい猛獣の形、目に見えぬ鬼の顔とか、おどろおどろしく大げさに描いた絵は、心に任せて描いてあり、一際見る者を驚かせ、写実的ではないですけど、まあ、それはそれでいいでしょう。

一方、それに比べて世間一般の大和絵の、山の佇まい、河水の流れ、見慣れた人家の有り様、それに

『なるほど』

と思える親しみ深く穏やかな風景なんかを、しっとりした構図に点景して。

その後ろには、険しくないなだらかな山の景色を世離れた寂しげな様子で幾重にも重ね描いて、再び手前に身近な籬(かき)の中を描くとなると、その心配りや描法の面で、名人の絵には、ほんととその絵に{{{『勢い』}}}っていうのがあって、そこら辺の者では及ばないところが多いもんです。

創造的な生き物の絵は、筆に任せて描いても{{{『それなり』}}}に見えるものですけど、写実的な山水画は、その上手下手がすぐ分かりますからね。

字を書くことで言えば、深い教養もないものの、手紙のそこら中で、筆を走らせるように書くもんだから、点の所が長く尾を引いて、そこはかたなく気取って書いてあるのは、ぱっと見は賢そうに際立って見えますけれど。

やっぱり本物の{{{『筋』}}}というものを丁寧に書いてあるのは、まあ表面的な書道の技法は消えて見えるけれど、今一度並べて見てみると、うん、やっぱり、本物の{{{『筋』}}}というものを心得ているほうが良いことが分かるものですよ。

ね、こんなことでもこうなんだから、まして、ねえ。

人が——女が——そういういろんな折々にあたって女っぽく気取ってみせる、見た目だけの風情なんかは

『信頼できたもんじゃない』

って、考えるようになりました。

というのも、こう見えてもいろいろありましてね。私も、いろいろ学びましたよ」

「へえ、どんなの。聞かせてよ」

藤式部の丞は、興味津々に詰め寄った。

馬の頭も言い惜しみするつもりはないらしい。

「それじゃ、若き日の話を。

好色めいた下世話な話ですけど」

と、膝を進めた。

狸寝入りを決め込んでいた源氏も、その話に体を起こす。

頭中将はとても熱心な様子で、頬杖をつくようにして話に聞き入っていた。

何処かの法師が世の真理を説教する所にいるような雰囲気なのも、端から見ていると滑稽だが

、本人たちは、そんなことを気にしてはいない。

こういうときだからこそ、各々の『夜の闇に男と女の交わした言の葉』というもののまでも、隠さずに話してしまうのであった。

馬の頭は大きく息を吸った。

「まだ私が——」

——馬の頭が、まだかなり下級の役職に甘んじていたころの話だ。

そのころ、愛おしく思えるような女が、特に一人いた。

が、先程も馬の頭が言っていた話に出てきた女のように、容貌に「欠点がない」というわけではなく「美しい」わけでもなかったから、「若い男の甲斐性」などと勝手に称して他に美しい女性との浮気も多くあり、その女を「終生の伴侶」と心に決めていたわけでもなかった。

「まあ、家のことも任せられるし——頼りになる女ではあるな」

とは思いながら、やはり「女」としては何となく物足りなく、馬の頭は、とにかく女性の出入りの華々しい生活を送っていた。

女のほうもそういう馬の頭の所業を知って、そのような馬の頭が憎らしく、やきもちを焼く。

馬の頭はそんな女が不愉快で、

「こんなふうじゃなくて、もうちょっとおおらかさを持った人ならなあ」

とってしまう。

女が、浮気のたびごとにあまりにしつこく疑うのも煩わしく、が逆に、

「こんな取るに足らない、身分の低い男に愛想も尽かさず、よくもまあ」

と思うと、心苦しくも思え、自然、浮気心がおさまるようなこともあった。

この女の性格は、もともとは自分には至らぬことについて、

「何とかしてこの人のために」

と、馬の頭のために無い知恵を絞り、得意でない面の心得についても、

「『駄目な女だな』とは思われまい」

と努力を惜しまない。

とにもかくにも、まめやかに馬の頭の世話をする。

つゆにも馬の頭の心に違わぬようにと心掛ける。

最初のうちは、馬の頭も

「勝気な性格の女だな」

と思っていたが、しだいに、それなりに、その女に対する優しさも身についていくように思えた。

美しくない容貌も、彼女なりに気に掛けていたようで、

「馬の頭に疎まれはしまいか」

と常日頃から、華々しく化粧もするようになった。

それほど親しくもなく、彼女がどんな人かを知らない馬の頭への来客があれば、

「馬の頭が、恥ずかしい思いをするかもしれない」

と、人前に出るのを恥じてはばかり。

そんなふうには、女は嗜みを忘れることなく、馬の頭も連れ添ううちに、

「気立ても悪くない」

と思うまでになっていったが、ただ一つ、例の憎らしい「嫉妬」というこの一つだけは、直ることがないようだった。

当時、馬の頭が考えたことがあった。

——こんなに、なんでもかんでも私の言うことを聞くのなら——

何とかして彼女が懲りるように、「別れるぞ」ってほんのちょっと脅し騙してみれば、あの嫉妬心も少しは直り、口やかましさもおさまるだろう——

それなりの計画を立て、ある日、女のところを訪れ、話の途中にわざとらしく機嫌を損ねてみせた。

殊更に、愛情無く冷淡な様子を見せると、女は例のごとく腹を立てて恨み言を言いはじめた。

馬の頭は

(しめた)

とばかりに、

「こんなに勝気な性格を押し通すなら、たとえ二人の間に深い宿縁があろうとも、その宿世に逆らって二度と逢わないでおこうよ。

『これが限り』と思うなら、そうやって分別無く、人を疑っていいばいいさ。

もし、これからも行く先長く連れ添うつもりなら、辛いことがあっても我慢しなよ。

『いい加減』ていうのがあるだろ？

貴女のその嫉妬心さえなくせば、『いとあはれ』って思うだろうに。

将来私が人並みに出世し、少しはそれなりの貫禄もつくようになったら、貴女に他にはまたとない『正妻』とするものを。

そうすれば他の女も及ばないのに……」

などと、自分ながら、

(巧く説教じみたことを言えるもんだな)

と思いながら、調子に乗ってまくし立てた。

が、女の様子が、どうも予想どおりではない。

馬の頭の別れ話に驚くどころか、仄かに薄笑いを浮かべて、

「貴方がいろんなことにおいてみすぼらしくって、その低い現在の身分を我慢して

『いつかは人並みに数えられるほどに出世するでしょう』

と待つことなら、まあ、いくらでもものんびりと思っていられますから、貴方の出世をどれだけ待たされても妬ましくはありません。

けど、でもね、貴方の辛いその御心に堪えながらも、その考えが改まることもあろうと、このまま年月を重ねるようなあてにならない期待は、貴方の出世を待つことに比べて、私にとってほんとに苦しいものでしょうから、互いに別れるのに良い時期でしょうね」

と、小癪なまでに言っただけ。

自分の計画がうまくいかなかったこともあって、また、女にそこまで言われたこともあって、馬の頭は腹立たしく、ひどい言葉をあれこれと言いだした。

女も、我慢できないようなことまでも言われてしまい、さっと馬の頭の手を引き寄せると、突然、彼の指に噛みついた。

「痛っ！」

指に、はっきりと女の歯形がついて傷になった馬の頭は、大げさに文句を付ける。

「こんな疵(きず)までもついてしまったからには、いよいよもって人と会うこともできなくなったじゃないか！

これじゃ、仕事にならないよ。

貴女が先程馬鹿にした私の低い官位の出世も、いよいよ難しく、もう人並みの立身も叶わなくなった。

私なんか、出家するのが分相応ってことなんだろうよ！」

そう言いおどし、

「じゃあ、今日こそおしまいだね」

と、指を曲げたまま出ていこうとした。

その去り際、傷ついて曲げた指を見せつけるようにして、

「——手を折りてあひ見しことを数ふれば
これひとつやは君が憂きふし——」

貴女と逢ってから今までのことを指折り数えて思い出せば、
今回のことだけが、私が君を嫌いになった理由ではなかったと思えてくるよ。

今までずっと何度も、君のその嫉妬心に、私は気が滅入っていたのだもの。

今回のことだけを恨むことはできないね」

と、歌ってみせる。

伊勢物語で、主人公が四十年連れ添った妻に送った、

「——手を折りてあひ見しことを数ふれば
十といひつつ四つ経にけり——」

という歌の前半をそのまま借りたものであったが、片や女との別れの歌、片や長く連れ添った妻との思い出を振り替える歌。

その理不尽さに、さすがに女も涙を流しだした。

「——憂きふしを心ひとつに数へきて
こや君が手をわかるべきをり——」

貴方の不条理な仕打ちを、この心一つに耐え忍んできましたが、
今この時が、貴方と別れる潮時であるのかもしれないね」

女がそう歌って——決定的となった。

しばらく言い争いながら、馬の頭は女の家を出ていった。

もともと馬の頭は、女に嫉妬深い性格を直してもらおうと思っていただけだから、本気で別れるつもりはなかった。

とはいうものの、直ぐにまた女の家に行くのもばつが悪い。

「まあ、頭を冷やすいい機会だろうさ」

と自分なりの言い訳を付けて、何日間経っても手紙も出さず、浮気相手の女の間を行き来してふらついていた。

しばらくして——十一月の下の酉の日に行われる賀茂の臨時の祭りを、間近に控えていた頃だ——。

賀茂の臨時の祭りでは「東遊び」という東国ふうの歌謡にあわせて行いう舞楽を、神前で奏するのだが、その役が馬の頭にあたり、その日も夜遅くまで練習に追われて帰りも遅くなってしまった。

日が暮れて、激しく霽が降りつける夜だった。

練習も終わり、各々退出して別れるところで、

「さて帰ろうか」

と思っでは見たものの、よくよく考えてみると、やはり「わが家」と言える様な所はあの女の所しか思いつかない。

「宮中に外泊するのは殺風景だし、気取った女のところも落ちつかないしなあ」

と思え、また、

「今頃どうしているかな」

という思いもあって、様子を見がてら、女の家に着いてみることにした。

雪を払いつつ、女の家に入り、一応、物陰から家の様子を窺った。

何となく体裁も悪く、きまりの悪い気もしたが、

「いくらなんでも、こんな雪の夜に予告もなく尋ねれば、あの勝気な女の恨みも解けるだろう……」

という考えもあって、仄かな期待もなくはなかった。

家のなかでは、灯が仄かに壁に向かって照り、その反射で辺りがひっそりと明るい。

冬用に柔らかな綿をつめて厚く繕ってある衣が、大きな伏籠にうちかけて香を焚き込めながら暖められている。

引き上げられるような几帳などの垂れ絹は、全てうち上げられていて、人の来訪を、

「今宵こそは」

と待っていたかのような様子だ。

「そら、どうだ。

なんだかんだ言いながら、やっぱり私を待って……」

といい気になって家に近づいたが、当の本人の姿が見えない。

それなりの女房だけが邸に残り、その女房たちの話によれば、

「親元の実家に、今夜は御帰りになられております」

とのこと。

艶な歌を詠んで置いてあるわけでもなく、『いかにも』という置き手紙があるわけでもない。

馬の頭にとってしてみれば、まったく素っ気なく風情もなく、拍子抜けした感じがしてしまう。

それに、今夜自分が家に来ることを女に見透かされていたようで、悔しい。

「あれだけ口うるさく私に容赦がなかったのも、私に『嫌われない』という気持ちがあったのかな」

などとも考えてしまい、その夜は、気分を損ねたまま女の家を後にした。

しかし、よくよく考えてみれば、その夜、女の家で伏籠にかけてあった着物は、いつもより『心とどめたる』と分かるほど念の入った色合い、仕立てで、本当に馬の頭の好み通りで、やはり、馬の頭が去った後にも彼のことを思って世話準備をしていたのであったのだろう。

「まあ、私に愛想を尽かすようなことはあるまい」

と、馬の頭にはそういう考えが——自惚れあったから、後々にも、とかく事有るごとによりをもどすよう誘ってみたが、女ははっきりとした返事を出さない。

馬の頭が面はゆい思いをしない程度に返事を送ってはきたが、その内容もただただ、

「今の貴方のままでは、我慢して見過ごす、という気にはなりません。

改心なさって心落ちつけて頂けるのでしたなら、また貴方と御会いたしましょう」

と書いてあり、女の本心が見えない。

「会いたいのか？会いたくないのか？

どっちなんだよ」

と馬の頭は困惑し、

「まあ、だからといって思い切ることもできまい」

と勝手に片づけてしまった。

女にちょっと懲らしめられたぐらいで、

「はい、そうですか。

これからは改心いたします」

というのも、男として口にすることもできず、ひどくお互いに意地の張り合いをしていたが、そのうちに、女はたいそう深く思い悩んでしまったのか、思い嘆きながら、突然この世を去ってしまった——。

「その女が死んでしましましてからは、冗談も言えないくらいの思いがしました。

頼りにして、一切を任せられる妻としては、ああいう女でよかったと、今でもふと思い出してしまいます。

何であんな大人げないことをしてしまったのかと……。

もっと、あの女にするべきことがあったに違いないと……。

ほんとに大事なことで、言い合うほどの『甲斐』というものがあつた女でね。

染物の手並みにおいても、紅葉を染めるっていう秋の女神の龍田姫に勝るとも劣らない、いや、龍田姫そのものだと言っても過言ではないほどでしたよ。

裁縫について言えば、たなばたの織り姫にもひけをとらないのでは、と思えるほどで、そういう技芸的な面も身についていて、ほんといい妻だったのに……」

馬の頭はそう言うと、

「本当に可哀相なことをしてしまいました」

と思いに耽った。

それを見て、頭中將は、

「その『たなばたの織り姫の裁縫に……』っていうのは二の次にしても、七夕伝説の二人のように、長い契りであつたならね。

後撰集の、

——逢うことはたなばたにつめにひとしくて

裁ち縫ふかたはあえずぞありける——

貴方と逢うことは、あのたなばたの二人と同じように数少ないのに、
貴方に頼まれた仕立物を縫うのは、織り姫のように完璧にはいかないものね

というふうには、なりたくないものだからね。

それにしても、馬の頭がそれだけ言うくらいだから、その『龍田姫』の染物は、またとないものだったんだろうな。

ほら、染物っていうのはさ、はかない花や紅葉にたとえられるものでしょ。

季節になると、さっと色づいてさ。その折々の風情を解せず、季節や情景に衣の色合いが相応しくなくて拙いのは、紅葉に露が映えないのと同じくらい見応えがなくて、露のように消えてしまいそうで、際立たないもの。

そういうことがあるから『妻を選ぶのは難しい』と、我々の話も結論が出ないでいるんだものね」

と、とりもった。

馬の頭も、気を取り直して話を続けた。

「さて、また同じ頃にね——」

——同じ頃、馬の頭の指を噛んだ女のほかに通っていた女性のなかに、気品も高く、心配りも本当にたしなみがあると傍からも見て分かり、ちょっとした歌を詠んだり、字をさらりと書いたり、琴をかき鳴らしたりする指先など、その手つき口つきといい、全てにおいて

「不得意なものは無いんじゃないの」

と馬の頭が思うほどの女がいて、ことあるごとに、その達者さに感心していたものだった。

例の指を噛んだ女の邸を、遠慮のいらぬ気の知れた所だと思っていた一方、この多才な女の所にたまに隠れて通っていつかは、こよなくこの女のほうに心がとまっていた時期もあったぐらいた。

指を噛んだ女が死んでしまっただけからは、馬の頭も、そう悔やんでいてもどうにもならず、愛おしく思っただけでも死んでしまっただけでは仕方ない。

直(じき)に立ち直り、その多才な女のところに、しばしば通うようになった。

いざ、通う回数が増えてみると、その女の欠点も見えてくるようになった。

少し派手好きで、艶なまでに気取った様子が、馬の頭の鼻についた。

馬の頭にとっては、あの指を噛んだ女のように

「家のこと一切を任せられる」

というほどに頼り甲斐のある女には思えない。

次第に、その女のもとに通うことも絶え絶えになったが、そのうち、女のほうにも「忍んで心通わせた男」ができたようだった。

神無月のころ、月が趣深い、ある夜のことで。

勤めを終え、内裏から退出するとき、ある殿上人と一緒に、馬の頭の相乗りすることになってしまった。

それなりに気の知れた男であったから、相乗りすることそのものは構わなかったが、その殿上人をつれて女のところに行くわけにもいかず、

「父上の大納言のところにでも行くかな」

と、自分の実家の方に車を向かわせた。

すると、殿上人は馬の頭に呟いた。

「ちょっとさ、こういう月の綺麗な夜に人待ち顔の女の宿ってやつを、見たいものですね」

多才な女の家が、馬の頭の車が向かっている途中の道筋にあったので、

「じゃあ、そこら辺の家にでも寄っていく？」

と話をもちかけた。

「知ってる女？」

「ん？——いや、まあ、噂でちょっとね。

それだけだよ」

馬の頭は、そう嘘をついた。

多才な女の家は、少し荒れた築地塀の崩れが何とも言えず、池の水が月光にきらめき、

「月でさえも池に宿るほどの邸なのに、素知らぬふりで通りすぎれない」

という雰囲気、二人は一緒に車を下りた。

(いかにも、あの女の家らしいな)

と馬の頭が思っていると――

「ああ、この家か」

その殿上人の独り言を、馬の頭は聞き逃さなかった。

その殿上人は、馬の頭をおいて、どんどん先に歩きだしてしまう。

最初から、そういう示し合わせになっていたのだろうか。

この殿上人はひどく心浮かれる様子で、門の近くの廊下の中門廊の、縁側っぽい所に腰掛け、しばらくの間、月を見上げていた。

馬の頭は、来慣れた女の家で、逆に居場所がなくなっていた。

下手に動けば、この風流好きな殿上人に、ここの女を知っていることがばれてしまいそうで、また、女の家の人に見つかれば、厄介なことになる。

なにか、ドキドキしてしまう自分が情けない。

菊は霜にあたって色変わりし、風流な思いをさせてくれる。

風に勢いづいた紅葉の乱れ散る様などは「あはれ」と、本当に思えた。

不意に殿上人が懷から横笛を取り出して、吹き鳴らす。

笛の音は、月夜に響きわたり、あわれな月を一層暗闇のなかで輝かせているよう。

「かげもよし——」

殿上人は笛の余韻を調べに、催馬楽、律「飛鳥」の一節をぽつりぽつりと歌いだした。

馬の頭は腕組みをして、それを聞いていた。

(——飛鳥井に 宿りはすべし や おけ 蔭もよし
みもひも寒し 御稔もよし——)

飛鳥井に泊まるのがいいね。

木蔭もたっぷり。水も冷たい。まぐさもいい。

『飛鳥井』って、たしかこんなだったよな。

なんで、こんな時にこの歌を——？

ははぁん、なるほど。

『宿りはすべし』——『泊まりたい』ってことか。)

殿上人の考えを馬の頭が勘繰っていると、あの多才な女が——よく鳴る六絃の和琴をしっかりと調律していたのだろう——琴を麗しくかき鳴らし、殿上人の笛に合うふうに弾きはじめた。

殿上人も再び笛をとり、二人の合奏が始まった。

女が弾き、御簾から聞こえてきたのは、はなやかな感じの琴の音であったから、清冽なまでに澄んだ月に、巧く似合っている。

殿上人も、いたく感心して、御簾のもとに歩み寄った。

馬の頭も、殿上人の後についていったが、月明かりに顔が照らし出され、女に気づかれるようなことがないよう、何気なく月に背を向けていた。

あまり殿上人に近寄っては怪しすぎる。

ここからは、その殿上人と女の「話」が始まるのだ。他の男が隣にいるわけにもいかない。

馬の頭は、離れていくふりをして、しっかり二人の会話が聞こえる場所で聞き耳を立てていた。

「庭の紅葉には、誰かが踏み分けた跡がないですね」

殿上人は、そう言って女の自尊心を刺激する。

（『誰も、男が来た様子がないね』ってことか。

——悪かったな。その男ってのは、この私だよ）

馬の頭は、叫ぶこともできずに一人むくれていた。

殿上人は、手近な菊を折って、

「——琴の音も月もえならぬ宿ながら
つれなき人をひきやとめける——

琴の音も、月の光も、すばらしい邸だけれど、
それでも、つれない男は、とどめることができなかったんですね

きまり悪くない？」

と、傍からも「男」が通っていないとわかる女を、冗談ぽく冷やかし、

「今夜は、今一度貴女の琴の音を聞こうという、私という『男』がいるのですから、弾き惜しみしないでくださいね」

と、いたく色っぽい言い様でもちかける。

女は、いかにも装った声で、

「——木枯に吹きあはすめる笛の音を
ひきとどむべき言の葉ぞなき——

木枯に吹きあわせる貴方の素晴らしい笛の音を、
この場に引き止める言葉を思いつくことができないわ。

木枯が私の言の葉を吹き飛ばしそうで……。

私の弾く琴の音では、引き止められそうにはないもの」

と艶っぽく言葉を交わした。

(はいはい。

色っぽいことで)

馬の頭が憎らしく思っているのを知らないで、女は再び十三絃の箏の琴を、盤渉調に奏でた。

盤渉調とは「盤渉」という音階を「宮」つまり主音にした律旋音階である。

(『冬』って感じを出そうということだな)

そういうところが、いかにも、あの多才な女らしく、現代風に琴をかき弾いている爪音などは、決して下手なものではなかったが、馬の頭としてはかえって見ていられない気がした。

「この女は、いつもこんな調子で男と逢っているのか……？」

ただ時々親しくする宮仕えの女房が、この多才な女のように「あくまで気取って艶っぽい」というのは「時々親しくする」程度の女なら、それもいいと馬の頭も思う。

が、時々にも「さる所」つまり「妻」として心身の拠り所とし、生涯を共に過ごすには、この多才な——そして多情な女では頼りなさすぎ、派手すぎる。

「自分のいないところ」で、男とこんなふうには話を交わす女を見て、嫌気がさし、その夜のことにかこつけて、その女のもとに通うことは、その夜以来、なくなってしまった——。

「——今話した、指を噛んだ女と多才な女を考え合わせますと、未だ若かった昔の私でさえ、やはり多才な女のような目立った振る舞いは、ほんとにけしからぬことで、頼りにはできないと思えたものでした。

こうして大人になったこれからは、そういうふうだけに考えるでしょうね」

馬の頭は、源氏のほうに顔を向けた。

「お若い光君は

『折らば落ちぬべき萩の露——折れば零れそうな萩の露』

とか

『拾はば消えなむと見ゆる玉笹の上の霰——手に取ると消えてしまいそうな玉笹の上の霰』

っていうふうな女の様子 of 艶に儚げな色っぽさのみに、趣を感じておられるでしょう？

でもね、私の歳になれば——そう、あと七年ほど経てば、私と同じ御考えになられますよ。

私ごとき賤しき者の『諫め』ではありますが——色っぽく、か弱き女というのには、お気を付けなさいませ。

そういう女は、過ちを犯して、他人に変な評判をたてさせてしまうものですからね」

馬の頭は、神妙な顔をして源氏に諭した。

頭中将や藤式部の丞も、例のごとく、いやに納得しながら頷いている。

源氏は、僅かに笑みを浮かべ、

(そういうものなんだろうな)

と、素直に思っていた。

「まあ、どちらにしろ、見た目の悪い、はしたない身の上話だってことです」

と、源氏が馬の頭を茶化し、皆で笑った。

外はいまだ雨が降りつづけ、雨音が辺りを包み込んでいる。

「——私は——愚か者のお話をいたしましょう——」

頭中將は、自嘲気味な苦笑を浮かべながら言った。

冗談めかした言葉とは裏腹な、その表情にひかれ、源氏は頭中將の話に聞き入ってしまった。

——頭中將がいまだ若く、右大臣家の四の君の婿となって間もなく、未だ近衛の少將であった頃の話だ——。

幾度となく、忍んで通っていた女が一人いた。

「こういう関係が続けてもいいな」

と頭中將も考え、最初は長続きするような関係だとも思えなかったのが、それでも馴れ親しんでいくと「あはれ」と愛おしく思えてくる。

正妻の——右大臣の娘で、弘徽殿女御の妹君でもある「四の君」の手前、毎日通って行くわけにもいかず、途絶えがちではあったが、

「忘れはしない」

と、その女のことを思い続けて、二人がそれなりの関係になると、女も頭中將を信頼し、男として彼を頼りにする様子を見せ、二人の心は、深く通い合うようになった。

「女というものは、一度その男を頼りにすると『うらめし』と思うようになるんだろうなあ」

と、自分ながらに考えて心配するようなことも時々あったが、その女はいつも何気ない様子を見せ、世間一般の俗な女とは違っていた。

頭中將が、宮中での仕事や四の君の目もあって長らく通えず、久しぶりに訪ねてみても

「たまにしか通わぬ男」

と思っている素振りもなく、女の態度に「うらめし」というようなものは感じられない。

毎日の朝夕出入りする夫を送り迎えするのと、全く変わらぬ態度で頭中將を遇した。

そんな女がいじらしく、頭中將は、

「これからも、私のことを頼りにしてくれていいんだからね」

と女に話したこともあった。

頭中將は、その女のことを愛人としてだけ通うのではなく、いずれ、正式に「妻」の一人として迎えるつもりであったのだ。

女には親もなく、経済的にも心情的にも抛り所がなく――

心細く――、

「この人ならば――」

と、折りある毎に自分を頼りにしてくれる女を、頭中將は可憐に思え、愛おしさも一層のものとなった。

そういうふうにな女の付き合いが続き、女が穏やかな性格であったので、

「私一人を慕ってくれるし――

家のことを任せることもできるだろう――

他に男ができるようなこともないだろうしな」

と安心し、ちょうど仕事が忙しくなり始めたこともあって、久しく女のもとを訪ねられなかった頃だ――。

頭中將の妻で、右大臣の娘である四の君のところから、その女のところへ、さる手筋を使って、情けのない酷いことを言ってきた――らしい。

――その時のことを、頭中將は知らない。

頭中將とその女との関係を知った四の君が、女のところへ人をよこし、それとなく脅迫したのだということを、跡になって知っただけだった。

――四の君がやらせたとは限らない。

あの誇りばかり高い女性が、そんなことをするほど私を愛しているのか？――

もっとやりそうな人物が――。

頭中將にとって、今となってはそのようなことはどうでもよい。

当時の頭中將は、そのようなことが女の身に起こったとも知らず、その女のことを思わない日はなかったものの、仕事にかまけ、手紙も出さずに長らく女のもとに通うことがなかった――。

「――私がそんなふうでしたからね――」

女も一人ですっかり落ち込み、心細かったのでしょう。

最初は、自分一人の心内に収めるつもりだったらしいのですが、私とその女の間には幼い愛児があったこともあってね、一人悩み抜いた末に、撫子(なでしこ)の花を折って手紙を添えて送ってきたんです」

頭中將は、自嘲的な笑みを浮かべ――目には涙が浮かんでいた。

「ほう……」

で、その手紙の言葉は？」

源氏が訊くと、頭中將は思いなおしたように、また、いつもの頭中將らしい表情を見せた。

「いや、『特別』というようなことは書いてありませんでしたけれど。

確か、

――山がつの垣ほ荒るともをりをりに
あはれはかけよ撫子の露――

山のなかで荒れた生活を送る賤しい私の家の垣根が荒れてしまうほど、
貴方が私のところに訪ねてきて来てくださらなくても、
時々、この撫子の葉に露がつくように、
私たちの愛おいしい子を可愛がってあげてくださいね。

と、古今集の

――あな恋し今も見てしが山がつの
垣ほに咲ける大和撫子――

によったものでした。

その歌で、女のことが思い出されましたから、久しぶりに訪ねてみましたところ、いつものように私を快く迎え入れてくれました——」

——頭中將が女のもとを訪れても、女はいつものように迎え、細々とした世話をやってのけた。

「この女は、いつまでも変わらぬ——」

と嬉しく思っていると、どうも女の様子がおかしい。

なにか物思いに耽り、荒れた家の湿っぽいのを眺め、いつしか女は涙を流しだした。

「どうしたの。

何を泣くの」

と頭中將が訊いても、女は答えてくれない。

虫の音と競うかのように泣く女を見ても、

「昔話に出てきそうな——

やはりこの人は美しい——」

と思えてしまう。

「——咲きまじる色は何れとわかねども
なほ常夏にしくものぞなき——

様々な色で花が咲いているなかから『これぞ』という花を、
区別をつけることは難しいものだけれど、
それでも常夏——撫子にかなうものはない。

私とこうして共に床にいる貴女に、かなう女などいないのだから——」

女は、

「我が子に会ってください」

と言っていたが、かといって、子供ばかりを可愛がっている場合ではない。

目の前でこの「常夏の女」に泣かれては、子供のことはこの際二の次にして、

「——塵をだに据ゑじとぞ思ふ咲きしより
妹とわが寝る常夏の花——」

僅かな塵でさえもかからないようにしよう。

妻と共に寝る床——そして咲き誇る常夏の花には——」

という歌も思い出されて、まずは常夏の女の心を慰めようと思った。

「貴女が涙を見せたそのわけを、私に聞かせておくれ」

頭中将がそう聞いても、

「——うち払ふ袖も露けき常夏に
あらし吹きそふ秋も来にけり——」

と、冗談っぽく言って、頭中将の質問をさらりとかわしてしまう。

最初、頭中将はその歌の意味を、

「貴方と寝る床の塵を払うはずの私の袖も、今は露がついたように涙で濡れてしまいました。

季節になれば『常夏』も過ぎて荒れた『秋』が必ず訪れるように、貴方は私に『飽き』してしまったのでしょうか？」

というふうに受け取っていたが、今思えば「あらし吹きそふ秋」とは、四の君による常夏の女への脅迫めいたことを暗にほのめかしていたのではないかと思える。

——私は何をやっていたのだ——

——あれほど女を愛しておきながら——

——なぜ気づいてやれなかった——

——その悩みを察してやることができないとは——

いま悔やんでも、虚しさだけが募る——。

頭中將は、話しながら涙を堪えていることが源氏にも分かった。

「本気になって恨みをみせる様子もなく、涙を落としても、私に対してきまり悪く思えたんでしょね。

遠慮深く取り繕って、私に涙を見せまいと隠していました。

私に

『この女は、私を甲斐性のない男と考えてるんだろうな』

と思われるのほうが、常夏の女にとっては心苦しいことのようにでしたから、私も

『まあ、この人のことだから心配あるまい』

と気楽に考えて、再び女のもとに通うことが途絶えがちになってしまいますと、ある日突然、女は私たちの子供と共に行方がわからなくなってしまいました。

まだ生きているならば、後見の者もない身の上でしたから、このはかない世間の中で、哀れに流離っていることでしょう。

私がああの常夏の女を愛おしんでいたあの頃に、もう少し、煩わしいほどに寄り添うような様子があれば、こんなふうに行方が分からなくなるようなこともなかったでしょうね。

格別に——途絶えるようなこともせず、『妻』の一人として、長く関係が続けていたことでしょ。

なまじ、常夏の女が、さり気ない『いい女』であったがために、こちらも安心して——

どんなに距離をおいても、どんなに長く離れていても『あの人は私を慕ってくれる』という思いが——

いや自惚れが——甘えがありましたからね——。

私たちの子供は、あの常夏の女に似て可愛らしく、まだ幼かったので、何とかして捜し出そう

と思い、手を尽くしているんですが、いまだに行方は知れません。

この女も、ある意味では馬の頭が言っていた『頼りにはできない女』の一人なのかもしれません。

女が素知らぬふうに、しかし辛い思いをしていたことも知らず、ただただ脳天気になを愛おしんでいたのは、無益な片思いだったのかとも思えます。

あの女の苦しみを和らげる手だてにはならなかったのだものね。

今、ようやくこちらが忘れようとしている頃、あの『常夏の女』は未だ思い切れず、時々にも、自分で選んだ道だとはいえ、男が訪れがあるはずの夕暮れ時に、独り胸焦がす時があるのかと思えて……」

頭中將の無理に繕った淡々とした言葉を聞きながら、源氏には思うことがあった。

——話の始めに頭中將が「愚か者の話」と言っていたが、その愚か者とは、一体誰をさして言ったことだったのだろうか。

——愛する女の思いを察することができず——愛する女を守り切れなかった男のことか——。

——男の愛を受けながら、その愛を貪欲に求めることができず——男のもとを去っていった女のことか——。

頭中將は何方のことを愚か者と言ったのだろうか。

（『愛する女を守れなかった男と、その男のもとを去った女』、か——）

源氏は、それとよく似た境遇にあった「男と女」を知っている。

——身近なところに——

身近であったところに——。

——遠い記憶の中に——

あまりにも幼かった頃の、あるはずのない記憶の中に——。

源氏は冷徹なまでに無表情だった——。

頭中將は、気を取り直したように話を続けた。

「こういう女を『長続きすることのない頼りなげな女』と言うんだろうなあ。

馬の頭が話した『指を噛む女』も、思い出されるほど忘れがたい女でしょうけれど、さしあたって共に暮らすには、その気性は煩わしく、悪くすると嫌気がさしてしまうこともあるものでしょう——？

琴をかき鳴らす『多才な女』の洒落っ気も、その程度が多すぎるのは罪深いもんです。

私が今話した頼りなげな『常夏の女』も『他に男ができて……』という疑いが全く無いわけではありませんから、私も『どういう女が理想なのか』というのを結局定めかねているんです。

これらの、それぞれの女たちの良い点だけを持った『欠点のない女』ていうのは『何処か』には、いるんでしょうか」

頭中將は、そう真面目に話しておきながら、

「まあ、いくら完璧な女を妻にしたいからといっても『吉祥天女』を妻にしたら、抹香臭そうで、真面目一点張りで、我等好き者の男共としては困ったものでしょうけどね」

と、皆を笑わせた。

吉祥天女は、帝釈天の娘で毘沙門天の妃でもあり、衆生に福德を授ける豊麗な美女神である。

——あの人と似ているかもしれない——あの人の様ならば、吉祥天女でも会ってみたいものだ——。

源氏は、何でもそういうふうに結び付けようとする自分に、独り苦笑していた。

「藤式部こそ、面白い話があるんじゃないの？」

「ちょっと話してよ」

頭中將が藤式部をせっついた。

「『下の下』っていう身分の私なんかに、貴方達のように良家の方々が聞いて面白い話があると思います？」

藤式部はそう言ってごまかそうとするが、

「はやく」

と、頭中將などは、もう話すものだ勝手に決め込んで責めたてる。

「それじゃあ」

と、やっと藤式部が何を話そうかと考えだせば、

「ほら『何を話そうか』って迷うほど、いっぱい話をもってるんじゃないか」

「いやいや、あれは人には話せないようなことが多く過ぎて、選びかねてるんじゃない？」

と、頭中將や馬の頭は冷やかしている。

「もう、話を聞き出そうとしておいて、そんなこと。」

藤式部殿に失礼でしょ」

一番年下の源氏に戒められて、二人とも小さくなってしまった。

藤式部は一つ咳払いをし、話しだす。

「私が、まだ『文章の生』であった頃の話ですが——」

藤式部がいまだ若く「文章生」であったことの話だ。

藤式部は「藤」の文字を姓にもつ、かの家柄に生まれたとはいえ、いわゆる傍系でしかなく、権勢門下の一族ではなかったために、頭中将などの名門の子息のように「蔵人」や「近衛」からその立身を始めわけにはいかなかった。

それよりも一段下の任官から始めることになり、それが「文章生」であった。

詩文、歴史を教授する大学寮の教官である「文章博士」の下が「文章得業生」、そのさらに下が「文章生」である。

「学生」から順次試験によって昇進し、そこから「中央」を目指し——「男」としての栄達を目指し——そう願いながら、若き藤式部が仕事に打ち込んでいた時のことだった。

当時、藤式部が付き合っていた女で「英才な女」の典型のような女がいた。

馬の頭が言っていたように、仕事の面のことも相談できるほど知識深い女で、私的な生活面において心得ておくべきことを注意することに関しても思慮深い。

公私共に、藤式部が「物足らぬ」と思うようなことはなかった。

漢学の才の程度にいたっては、生半可な博士では太刀打ちできず、下手をすれば博士のほうが恥をかいてしまうほどであった。

全てにおいて他人が口を挟む余地のないほど、その学識や思慮深さが完成された女だった。

女と知り合ったのは、藤式部が任官してまもなくの頃だった。

自分の上司でもある博士のもとに、学問の教授に通っていた時、ある話から、その博士の家に美しい娘が多くいることが分かった。

その家に何度か通ううち、ちょっとしたことがきっかけで、博士の娘の一人であるこの「英才な女」と出会い、「それなり」の関係になったのだった。

学才豊かな女は「女」としても充分、藤式部を満足させてくれた。

しかし、そのことがすぐに博士の耳に入ってしまった。

自分の部下が自分の娘と関係を持ったことについて、博士はどう思っているだろうかと、藤式部は正直不安になった。

「怒っているんじゃないだろうな」

と内心落ちつかない。

藤式部はできるだけ博士と顔を合わせないようにしていたが、しかしとうとう、ある宴の席で同席することになってしまった。

博士が、盃を持って藤式部に近づいてくる。

(何と言われるだろう)

とひやひやしていると、博士は藤式部に酒を勧めながら、

「わがふたつの途歌心を聴け」

と言った。

——主人良媒を会す

酒を置いて玉壺に満てり
四座且く飲むことなかれ
我が両つの途歌心を聴け
富家の女嫁し易し
嫁ぐこと早ければ其の夫を軽ずる
貧家の女嫁し難し
嫁ぐこと晚ければ姑に孝あり
聞け君婦を娶らんと欲るものならば
婦を娶ること意如何——

という、白氏文集の諷論二秦中吟「議婚」の一部を吟じたのだ。

「家は貧しいが、この詩のように、うちの娘は『嫁』としては良いぞ」

ということなのだろう。

(白氏文集に則って、盃をもってくるなんていうのは、いかにも文章博士らしいやり方だけど——)

藤式部は、その博士に感心しながらも、一方で困惑していた。

「英才な女」は、未だ若かった藤式部が関係を持ち、その知識は何人にも及ばぬほどであったのだから、藤式部と同じ年か、若しくは少なくとも年上の人であった。

となれば、その父たる博士は藤式部の父親と、そう変わらぬ年齢であったに違いない。

その年配の男が、学才があるにしても下級の者が務める『文章』に就き、若い藤式部と比べても二つしかその地位階級が変わらぬ。

しかも「娘が多くいる」というのだから、経済的にも苦しいことだろう。

自分の娘を、自分よりは将来が有望な藤式部の妻として送りたいのは、分からないでもないけれど――。

当時の藤式部は、英才な女と「それなり」の関係にはなったものの、その女を妻とする気は正直言ってなかった。

相手の親の気持ちを思えば、このままの状況が続けて通っていくのも憚れたが、かといって女を妻とする気もなく、といって別れる気も起こらず――そうこうしながらも、踏ん切りつかずに「英才な女」との関係が続けていた。

「英才な女」は情深く藤式部の世話をし、夜、床のなかでの語らいにおいても、身につく学問や、お役所勤めに役立つような理屈っぽい知識を教えてくれる。

女の「筆の流れ」というものは男の藤式部から見ても「巧い」というより「綺麗」と呼べるもので、手紙をよこすにでも女が普通使う「仮名」というものは使わず、漢字だけで、いかにも「理にかなった」文を巧みに書き上げていた。

「女が、仮名も使わず漢字ばかりで……」

藤式部も感心するやら、滑稽やら。

しかし、そんな「英才な女」がおもしろく、いつしか――無意識ではあったが――その女を勝手に「師」とも思うようになって、色々なことを教えてもらうようになった。

男と女が——しかも、いわゆる「関係をもった」男と女が——それも女が男に教え、男が女に教わるようになったのは、今から思えば可笑しいものだ。

しかし、当時の藤式部は、そのおかげで下手は下手なりに曲がりなりにも「漢詩」と呼べるものを作るほどになっていた。

「文章生」である彼にとっては、かけがえのない財産の一つとなる。

今にいたってもなお、その恩は忘れていない。

——が、その女を「妻として傍を離れず頼りにする」という発想は、藤式部は持たなかった。

「自分のような学問のない男は、いずれ何かと劣っている点を露見してしまうに違いない。

その時、あの女に、はたして対等に言い合えるだろうか？

女のほうの知性に圧倒されて、こちらが恥をかくのが『おち』だな」

と思えたからだった——。

「——だから婚姻には踏み切れなかったんですよ。

一人では何もできず妻の助けがいるような頭の悪い私でも、あそこまで「知識深い」女は——ねえ。

ましてや、貴方たちのような学高い若君たちには、しっかりした必要以上に切れ者の妻なんか、いらないでしょ。

『つまらない』とか『不如意だ』とか思いながらも、ただただ自分の意に適い、

『宿縁がもしかしたらあるのかもな』

ということだけで別れられないということもあるんですから、男なんてかわいいもんですよ」

藤式部はそう言う肩をすくめた。

その「英才な女」の話の続きがあることを察したのだろう、頭中將は、

「へえ、変な女がいたもんだね」

と、藤式部をそれとなくその気にさせた。

もともと、藤式部も話さない気ではなかったらしい。頭中將のが「おだて」だと分かっているが、それと知らぬような素振りで話しだす。

小鼻のあたりが少し動きながら——それが、そんなときの藤式部の癖だった。

——女に久しく通わず、ちょっとしたついでに久しぶりに立ち寄ってみたときの事だった。

普段、二人でいるときに寛いでいる居間に通されるものと思っていたが、違った。

心外にも、襖を隔てた隣室に通され、侍女の話によれば、女とは襖越しに話さねばならないという。

「初めて家に上がる男じゃあるまいし——何故、付き合いの長い男と、こうもよそよそしく会わねばならない？」

と、藤式部は納得できない。

——久しく通ってこなかったことを妬いているのか？

と思えば馬鹿らしく、呆れてしまう。

(これもこの女と別れるいい潮時かな)

そういう考えも浮かんでいるところに、ようやく女が隣の居間に着いたようだった。

(恨み言でもならべる気か?)

藤式部がいろいろと反論の手を考えていると、この賢女ときたら、浅はかなやきもちをしている様子など全くない。

「男女の道理」というものを悟った様子で、恨み言一つ口にしなかった。

(.....妬いているわけでもないのに——なんでこんなによそよそしいんだ?)

藤式部は不思議でならなかったが、そんな彼の雰囲気を感じたのだろう、女はせかせかした様子で慌てたように説明しはじめた。

「月ごろ風病重きに堪へかねて、極熱の草薬を服して、いと臭きによりなむ、え対面賜はらぬ。

まのあたりならずとも、さるべからむ雑事等はうけたまらむ」

と、本当に——皮肉まじりではあるが——感心してしまうほど、格式ばった言い様。

「最近『風』にかかっちゃってねえ。

ちょっと辛いから、蒜(ひる)の薬を飲んで、ちょっと臭くて、あなたと面と向かって会えないんだあ。

こうやって顔を会わせることはできないけれどお、ちゃんと『妻』としての用事はこなすからね」

.....まあ、ここまで極端に打ち解けた話し方も必要ないが.....しかし、男と女の、しかも「それなり」の関係にある二人の間で交わす会話は「それなり」に打ち解けていてよいはずだ。

「風病」とは、「風」が体内に入って臓腑に発すると言われる病で、脳溢血、高血圧症、神経痛、神経炎のことであるが、普通はただ単に「風」と呼び「風病」とは言わない。

「蒜(ひる)」——つまり「にんにく」を「極熱」と呼んだり、「堪へかねて」「.....により」「え対面賜はらぬ」「まのあたりならずとも」など、こんな堅苦しい言い方は、いわゆる「男言葉」である。

いかにも、この漢才豊かな女らしいが、そこがまた滑稽で呆れてしまう。

「にんにく臭くて会えない」

風流のかけらもない——そのくせ女は男言葉をならべて風情を繕う。

藤式部は嘆息を一つついて——何と言ってよいやら分からなかった。

やっとのことで、ただ、

「承知した」

と、できるだけ声に感情が出ないようにして言うので精一杯だった。

女は、そんなよそよそしい藤式部の態度を、物足りなく思ったのだろう。

——もっといたわりの言葉を欲しかったに違いない。

「この臭いが消えるころには——病が治ったら——またいらして下さいまし」

と声高々に言う。

女の言葉を見殺しにして聞き過ごすのも可哀相に思えたが、しかし少しの間も逡巡している場合ではない——

こうしている間にも、にんにくの臭いが隣の部屋のこちらにまで臭ってきて苦しく、藤式部は明らかに逃げ腰になっていた。

「——さがにのふるまひしるきタぐれに

ひるま過ぐせといふがあやなさ——

蜘蛛のような動きで——蜘蛛がその糸で獲物を知るように——

私の訪れを分かっているはずの、この夕暮れ時に、

『昼間は待って』——『蒜(ひる)の臭いが消えるまで待って』——というのは、理に合わないでしょう？

何の口実？

男がいるなら、はっきりとそう言ってくれていいんだよ？」

と最後まで言い終わる前に走り去る。

「男を存在を疑っている」ことをほのめかして、女に別れを告げたのだ。

英才な女は後ろから、

「——逢ふことの夜をし隔てぬ仲ならば
ひる間もなにかまばゆからまし——

私と貴方が、一夜とて隔てることなく御逢いしている仲であるなら、
昼に御逢いすることになろうとも、
貴方の御姿が眩しいことはないのですが——。

——疎々しい貴方のことですから、私は自分の蒜の臭いが気になって御逢いできないのです。」

と歌を読む。

——さすがにあの女らしく、素早い返歌であった——。

藤式部がしずしずと落ちつきはらって言い終わると、源氏たちは、

「またまたあ、そんな作り話をさあ」

といって笑った。

「どこにそんな女がいるっていうんだよ！」

「そんな女といるなら、おとなしく、鬼とでも会ってたほうがまだよ」

「気味の悪い話だなあ、もう嘘ばかり」

と皆でして藤式部を冗談めかして爪弾きをし、

「話になんないよ」

と貶している。

「するなら、もう少しましな話をしろよ」

と、頭中将が藤式部を責めるけれど、本人は、

「これよりも、面白い話がある？『現実は物語よりも稀なり』だよ」

とすまして答えていた。

夜もふけて、馬の頭は話のまとめに入っていた。

「男にしても女にしても全て、中途半端な者に限って、自分がわずかに知ってることを、知ったかぶって残らず他人に見せ尽くそうと思っているのは、困りものですね。

三史五経やいろいろな専門の学問を、徹底的に究め尽くすっていうのは、さすがに可愛くない

ですけどね。

女だからといって

『世間の公私のことなんか、全然知らない』

っていうのではないでしょ？

わざわざ勉強しなくても、ちょっと利口な女なら、見たり聞いたりしたことでも、すぐ覚えて、いわゆる『知識』になることも、自然と多いでしょうからね。

そのあげく、漢字をさらさらと書いて、それほどの高い教養があるはずのない女同士の手紙に、半分以上もそういう調子で書き込んであるのを見ると

『ああやだ、もうちょっと女らしかったら……』

って思える。。

書いている本人はそうは思っていないんでしょうけど、そういうふうな漢字ばかりの堅苦しい文だと、自然と読む方もぎくしゃくした読み方になってしまうのは、やっぱり変でしょ。

こういう女は、上席の女房のなかにも最近では多くなりましたからね。

和歌を読むことに得意気になっている人が、次第に歌のことにばかり気を取られることが、ままにして多くありますし、そういう人が、初句からしっかり踏まえた歌を、こちらが忙しかったり、機嫌のすぐれないときにかぎって詠んでよこすのは、ほんと不愉快で。

返歌しなければ気が利かぬ男と思われかねないし、かといって忙しくて『できない時』というものがあるんですから、そういうときには困ったことになりますよね。

元日とか、九月九日の『重陽』のときに開かれる『節会』のような宴会がある時とかさ――

ほら、五月五日になると、武徳殿に行幸があつて菖蒲の鬘をつけた者たちに薬玉を賜って、競馬が行われるときなんかさ、すごく忙しいじゃない。

そういう日の急いで参上しなきゃならない朝なんかで、落ちついて模様とか分別の『文目』でさえも考えられない時に、趣向を凝らして手紙に菖蒲の根の歌を贈ってきたり――

菖蒲の長い根が厄除けになることは、こちらも知ってますけどさあ——

九月九日の宴のときに、こっちは宴で作らなきゃならない漢詩の腹案を

『できるだけ趣向を凝らして、工夫して——』

って真剣になって考えてて、暇がないのにさ、菊の露になぞって『涙』の歌を贈ってくるとか、ね。

こっちはそういうことにいちいち付き合っておかないといけないでしょ。

そういう特別な場合じゃなくても——ほんと、後になって見ると、お洒落で趣深いものではあるんですが——その時々事情とか状況に合わず、こっちはそんなことを気にしてる場合じゃないのに、そういうことを全然察せずに歌を詠んでよこすのは、ほんと気が利かない。

万事につけて、普通に考えて

『どうして今この時にこんな事？』

って思える場合とか、いろんな折節とか、

『やっていいのかどうか、どっちかわからない』

っていうときには、勿体ぶったり、風情ぶったりしないほうが無難でしょうね。

すべて、自分が知っていることでも知らぬ顔で取り繕い、言いたいことでも、そのうちの一つ二つは言わないでおくっていうのがいいんじゃないでしょうかね」

馬の頭がそういうと、藤式部はいたく感心していた。

源氏は、ただ一人のことを——あの人のことを——心内に思い起こしていた。

——いままでの馬の頭の議論をもっても、あの人には足りぬところもなく、過ぎたところもない。

「理想のいい女性」のそのままじゃないか——。

——やはりあの人は——。

藤壺の比類のない「美しさ」に、源氏は独り胸を締めつけられる思いであった。

結局、どうこうという結論が出ぬままに、最後には他愛のない話になって、四人はそのまま夜を明かした。

——外では、雨音が緩やかになっていくのが分かった——。

こうして天気も持ち直し、宮中の物忌みもそれにあわせるように解かれた。

これほど長期にわたって宮中に滞在するのも、舅である左大臣に気の毒で、源氏は、頭中将たち三人と別れた後、宮中を退出し、妻である葵の上が待つはずの左大臣邸に向かった。

左大臣邸の有り様は、文句のつけようのないほどきちんとしている。

いまでは、左大臣の妻である大宮とともに「女主人」である葵の上の目が行き届いているからであろう。

葵の上は、端麗で高貴であり、何事にもしっかりといて「乱れたる」ところなど表には全く見せない。

「こういう人を、馬の頭たちが褒めていた『実直で頼り甲斐のある女性』というんだろうな」

と源氏にも分かっていた。

しかし、そのあまりにも「しっかりとした」葵の上は、源氏に頑に心を閉ざし、気詰まりなまですりすまし、感情を感じることもできない。

姿を見せることもなく、几帳の向こうで独り座している。

その美しいはずの葵の上の姿を、源氏は最近見ていない。

——私が求めているものは「妻」ではない——。

——そのようなものは二次的なもの——。

——葵の上は分かっておられない——。

——彼女が望んでいるものは——何だ——？

世間話を話しかけても、葵の上が快くそれに答えてくれることはない。

物足りなく、源氏は、葵の上付きの女房である中納言の君や中務などの若い女房たちと、冗談

を交えながら談笑していた。

暑さに、着物を少しはだけ気味に着込み寛いでいる源氏の様子を見ては、女房たちは、

「わあ……カッコいい——」

とうっとりしている。

ちょうど左大臣が渡ってきて、源氏が寛いでいることもあって、几帳を隔てて対坐して、話も弾んでくる。

「ほんと、超暑いよね」

源氏が冗談めかして苦い顔をして、女房たちを笑わせる。

「しーっ。

静かに」

と自分で笑わせておいて、人指し指を口にあて、脇息に寄り掛かる。

そういう、いかにも貴人らしい源氏の振る舞いが、神がかりなまでに美しい。

——葵の上は、几帳の隙間から、その美しい源氏の姿を覗き見て——そして、独り胸を焦がす——。

——あれほど美しい光君が私の夫だなんて——。

——やはり私では不釣り合いに違いない——。

——私のような年増さな女では——。

——私のような淫らな女では——。

——あの美しい光君には似合わない——。

——きっと、光君は私を好いてはおられない——。

——私と婚姻をしたのも、父上と帝が決めたことだもの——。

——光君が望んだことではないのだもの——。

——光君と他の女性との浮名も、よく耳にするし——。

——それに——それに源氏は、他の誰かを特別に愛しておられる——。

——光君の心の中には、私はいない——。

——私には分かる——

——なぜなら私は——こんなにも光君を——

——でも、いまさら、光君に自らすがりつくなど、私にはできない——。

——私は、これでもかまわない——。

——私は、このままでもかまわない——。

——そうだ——このまま愛されずともかまわない——。

——それでも私は「妻」でいられるのだから——。

葵の上は——己に言い聞かせていた——。

日も沈み、空は暗くなりはじめていた。

左大臣も自室に戻り、葵の上も気分が悪いからと奥にいつてしまっていた。

源氏は、おもしろくなさそうに、横たわっている。

「あ！そうそう、光君、今夜は『中神』が内裏から塞がっておられるんですよ！」

「そうだわ、今日はお避けになる方角でしたわ」

女房たちが慌てだした。

「中神」とは陰陽道を説く天一神のことである。

六〇日を一周期とし、一六日は天井にいるが、以後五日あるいは六日ずつ八方に遊行する。

その中神がいるという方向を「方塞がり」といって忌み、「方違え」をするのだ。

その日は、内裏からこの左大臣邸への方角が、その方角にあたるため、それを避ける「方違え」のために、別の邸に移らねばならないのだ。

こんなに遅くなるまで気付かぬなど、側付きの女房のとんだ失態であったが、源氏はそれほど怒っている様子も見せなかった。

「私の母方の実家も、同じ方向だしなあ。

どこに方違えするっていうの？。

もういいよ、いまから動くにしても気分も乗らないし」

源氏はそう言うと、そのまま寝入ってしまいそうになる。

「そんなあ、それでは縁起が悪いですよお」

女房の一人が困惑している。

「そうだ、紀伊の守の所なんかどう？」

一人の女房がいうと、他の女房たちも賛同した。

「光君、『紀伊の守』の邸なんかがよろしいですわ。

左大臣閣下に親しくお仕えされている方なんですけれど、東京極の中川の辺りの家で、最近、邸内に遣水を引き入れて、涼しい木陰も多いんですよ」

女房が源氏に提案してきた。

「それ、いいね。

気分が悪いからさ、牛車ごと入れるような所がいいものね」

紀伊の守といえば、若い源氏から見ても目下の者である。

今からでも、そして牛車ごと邸内に入れられるほど、気楽に行けるところではあった。

ただ単に「忍んでいく」という「それなり」の所ならば、その気になれば多くあったはずだが、しかし、そこに行こうとは源氏は思わなかった。

仕事に託つけ、今まで久しく左大臣家に——葵の上のもとに——通わなかったのに、珍しく通ってきた今日にも、

「方角が悪いから」

などといって、予定を変えて、

「他の女のところに通っていった」

と、左大臣が考えでもしたら——舅である彼が気の毒に思えた。

紀伊の守ならば左大臣もよく知っている。

源氏が方違いに行ったと知っても、少なくとも心配することはないだろう。

心通わぬ妻の父とはいえ、あの実直な舅に源氏はできるかぎり気苦労をかけたくなかった。

紀伊の守邸に使いの者を走らせれば、早速、紀伊の守がやって来る。

「光君のお召しとなれば」

ということなのだろう、実に速い。

源氏が直接、方違えの件を申しつけると、少し間をおいてから承諾した。

もともと、紀伊の守が断ることなどできない。

源氏は、

「方違えのために、卿の邸に泊まるぞ」

と、命じているのであって、頼んでいるわけではないのだ。

紀伊の守は、源氏の前を下がった後、

「私の父の『伊予の介』の邸のほうで、凶事を避けなければならないことがございまして……。

伊予の介自身は任地の伊予国に赴いておりまして、男の供人はすべてそちらに行っておるのですが、伊予の介の邸にいる女どもが全て、我が邸に来ている次第です。

それで今、寝殿も手狭になっておりますし……

失礼なことにはならないでしょうか？」

と、源氏の側近に問うてきた。

側近が源氏にその事を伝えと、

「その『人けが近い』っていうのもいいじゃないか。

『女遠き旅寝』っていうのは、いやなものだからね。

なんなら、女たちの几帳のすぐ後ろで寝させてくれてもいいんだけど？」

と、源氏は笑って許した。

「まあ、ちょうどいい所だと思いますよ」

源氏の供人も賛成する。

紀伊の守が邸に帰った後すぐ、源氏よりも一足先に、使いの供人を紀伊の守の邸に向かわせた。
。

その後、源氏も目立たぬように、わざと大げさでない出口から、急いで出立する。

左大臣には知らせなかった。

行き先が紀伊の守の邸とはいえ、知らなければ、それにこしたことはない。

わざわざ知らせるのも、言い訳がましく聞こえるやもしれぬ。

供人も親しい者を数人だけ連れて、源氏は紀伊の守邸に向かった。

「なんて急な」

紀伊の守の家の者たちは、源氏の急な来訪を迷惑がるが、一足先に来訪の準備に紀伊の守邸に到着していた源氏の供人たちは、それを気にするふうもない。

紀伊の守ごときが——一国の地方国主ごときが——世にも名高い光君の来訪を拒絶できるはずもなかろう——

まして、その邸の者たちはただ命ぜられるままに働けばよいのだ——。

それが、この世の羨望を独占する源氏の供人のもつ、傲慢と言えは傲慢であった。

寝殿の東半分を整理して空けさせて、仮そめの部屋を仕度する。

部屋の準備が終わるころ、ちょうど源氏が紀伊の守邸に到着した。

寝殿と、寝殿から渡殿と呼ばれる廊によって結ばれた「東の対」の間を、南方へ流れる遣水の風情なども、しかるべく趣向を凝らしてある。

源氏が泊まる寝殿の東半分からは遣水が近く、源氏が「涼しく」と言ったことを、よく守っていた。

雑木の枝を編んだ、いわゆる柴垣は田舎っぽい雰囲気をかもし出し、また庭先の植え込みである「前栽」も、よく留意されている。

風は思いのほか涼しく、そこはかとなく、虫の鳴き声が耳にとどいてくる。蛍が多くい乱れ飛び、洒落た風情は源氏を満足させていた。

源氏の供人たちは、渡殿の下から湧いている泉を見下ろすところに腰掛け、酒を飲み交わし、すっかり出来上がってしまっている。

邸の主人である紀伊の守などは、源氏やその供人に出す御馳走の用意に、文字どおり「奔走」していた。

「玉垂れの 小瓶を中に据ゑて あるじはも や さかな求ぎに さかな取りに こゆるぎの磯の若布 刈り上げに」

という風俗歌を、まさに地でいっている。

「昨夜の馬の頭が『中の品』について、とうとうと話していたのは、こういう程度の家柄のことを言うんだらうな——」

そう呟く源氏は、もう一つの不埒な自分が目覚めていることをよく知っていた。

「——中の品の女か——」

ならば——」

「——この家に、気高くとまった女がいるそうですよ——」

供人のそんな世間話に、源氏はなぜか興味を持った。

「気高くとまった女」と聞けば、自分の妻である葵の上のような女を想像してもよさそうなものだったが、不思議と負の印象はなかった。

「他人事となれば、人は寛大になれるものらしいな——」

そんな源氏の自嘲を知る者はいない。

その話を聞いてから、注意して耳を凝らしていれば、寝殿の西側——源氏のいる東側半分とは格子や襖障子などで仕切りがしてある向こう側から人の気配がする。

衣擦れの音を聞く限りでは、女ばかりが集まっているようで、その衣擦れのはらはらとした音や若い女たちの声が愛らしい。

自分たちの反対側の東側半分に源氏の一行がいることを知っていて、さすがに気兼ねしているのだろう、笑ったりしている雰囲気は、小さく、取り繕っていることが分かる。

最初は外側の格子が開いていたようだが、紀伊の守が、

「不用意な。

光君の御一行がいらしておられるのだから」

と小言を言って、格子を下ろして閉じてしまった。

外から中を覗き見る事もできなくなって、内心源氏は苦笑した。

「気がきくのか、きかないのか……」

灯の隙間からのびる火影、襖障子の上から洩れて天上に映る灯が、なんとなく「秘密めいて」おもしろい。

「どこからか——」

と、西側を覗き見る隙間を探すが、これといったものはない。

しかたなく「しきり」に寄り添って声だけを聞くことにした。

西側にいる女たちは、どうやら部屋の中央に集まっているらしい。

ひそひそ話をしているが、よく聞こえる。

しかも源氏のことを話しているらしかった。

「ほんと、すごく真面目っぽくて、まだお若いのに、ちゃんとした奥様がおありになってるのもさ、ほんとつまないわよね」

「けどさ、そういう『お忍び』のところもあって、それなりにお通いになってらっしゃるそうよ

」

「じゃあ、わたしも可能性ある？」

「だめだめ、絶対に私」

などと笑っている女たちの話を聞くにつけても、源氏としては藤壺への思いを世間に見透かされていそうで、胸をどきりとさせた。

——そんなはずはない——

源氏には分かっている。

——この思いを知っているのは——私だけ——と。

——あの人でさえ、分かってはおられないかも知れぬ——と。

しかし、もしもここで、その「秘密」を女たちが噂していたら——。

——私はどう思うだろう——。

——私はどうするだろう——。

——私はどうすべきだろう——。

——私は——。

源氏が思いを巡らせるうち話は変わり、別段面白くもない女の世間話になっていて、源氏は途中で聞くのを止めてしまった。

話を聞くのを止める直前、再び源氏の話に戻った。

式部卿宮——世間では『朝顔宮』とよんでいるが——に、源氏が送った歌をちょっと細部を間違えたまま女たちは噂しあっていた。

余裕ぶって歌をうたいたがり、しかも間違っている——

源氏は「世間の女」に幻滅した。

紀伊の守がやって来て灯籠の数を増やし、また、燈台の芯を引き出して、灯を明るくする。

間食として、菓子や果物を持ってきた。

「『帷帳』のほうは用意できているの？」

そちらのほうの気配りがないようじゃ、興冷めもいいところだろう？」

源氏が意地悪く冗談を言った。

——「あちら」のほうの用意はできているんだろうな——？、と。

自分と葵の上との婚礼のときに吟じられた、

「我が家は 帷帳も垂れたるを 大君来ませ 婿にせむ 御着に 何よけむ あはび さざえか
石陰子よけむ」

という下世話な歌にわざと準えてみたのだ。

「何よけむ——どんなことがお気に召すものやら、小生の身では分かりかねますので……」

と、紀伊の守はかしこまって真面目ぶって答えて、肩すかしになってしまった。

しかもちゃんと「我が家は——」に準えて。

——なかなかやる——。

紀伊の守はすました顔で、そこに控えていた。

邸には何人か子供がいた。

紀伊の守の子供が可愛らしい様子で、ちょこんと座っていた。

たしか以前、見習いのために特に殿上の間に上がってきたときに見かけたことがある。

遠くのほうには伊予の介の子、つまり紀伊の守の幼い弟も見える。

そういう多くの中に、特に上品な様子の、年頃は十二、三の少年がいた。

——少年……だろう——？

と、源氏はその衣装によって認識するしかない。

その少年の顔は少女っぽく、愛らしい。

軽く化粧をさせてみたいほどであった。

「あれは、どこの子？」

源氏が紀伊の守に訊いた。

「ああ、『小君』のことですか——

ご存じじゃないですか？つい最近亡くなった衛門の督を。

その衛門の督の末の子でして。

衛門の督もたいそう可愛がっておられたようですが、その衛門の督もすでになく、その後、あの子の姉が、私の父伊予の介に嫁ぐことになりまして、その関係でこうして仕えております。

頭の良い子で、私の目から見ても見込みがございなす。

本人も殿上に上がって殿上童になることを望んでおるようですが、いかんせん、父であった衛門の督も今は亡く、私では後見としては役不足でして。

たやすくは出仕できませんで……」

紀伊の守は、『小君』と呼んだ少年のほうを見つめながら、そう、もらした。

「可哀相に……ん？

ということは、あの子の「姉」が、君の『継母』になるわけか？」

「さようです」

紀伊の守の顔に、複雑なものが浮かぶ。

（そうか……）

源氏は、自分の記憶の中から或る事を引き出した。

故衛門の督の娘といえは未だ二十代前半——紀伊の守とそう変わらぬ歳であるはずだ。

その娘が伊予の介の後妻の一人となっていたとは……。

「不相応な歳の母親をもつことになったもんだね。

たしか、衛門の督の生前、その娘の入内の話があったんじゃないか？」

そういえば、帝がその入宮の話を聞いていて

『衛門の督が娘を入宮させたいと、前にちらりと話していたことがあったけれど、どうなっているんだろう』

と、いつぞやおっしゃっておられたよ」

源氏は口ではそう言った。

「私もその話は耳にしたことはありますが……。

御覧のとおり、このようになっております」

紀伊の守は源氏が考え、飲み込んだ言葉を察しているようだった。

「衛門の督」といえば、六衛府の一つで宮中の警備にあたる衛門府の長たる役で、従四位下相当の者があたる。

いわゆる殿上に上ることのできる「殿上人」で、宮廷社会全体から見れば「中の上」といったところだろうか。

しかし、もし、その娘が入内を果たし、帝の寵愛を受けるとなれば、その父たる衛門の督は、その上の地位を——「貴」なる地位を——保証されたはずである。

事実、衛門の督はそれを望み、願い、思い描いて、娘の入内の話を帝にしていたのだろう。

そして、その娘の後見をしてやれるほどの地位に、衛門の督は辛うじて「いた」のだ。

そして、栄達への高き段に手が届いていた衛門の督は——その途上、この世を去った。

娘は、自分の父という存在だけでなく、約束された輝かしい将来も、己の人並みの安定した生活さえも無くしてしまったのだ。

壮年になって、実力では従四位下程度になるのが精一杯であった程度の男の親族が、その娘を入内させるだけの後見力をもっているはずもない。

入内の話が立ち消えになったのも、その頃だ。

そして娘は、自分と幼い弟、そして父や自分に仕えていた少数の供人、女房の生活のために、父娘ほども歳の離れた——自分と同世代の子供さえもいる伊予の介の後妻として嫁いだのだ——。

源氏の母と似た境遇にありながら、無理を通して入内した今は亡きかの更衣とは違う道を歩み、孫さえもいる老人と婚姻することになり、自分と同世代の息子ができてしまった女は——どのような思いを抱いているのだろう。

「後々には入内し、帝の下で——」と願われ、望まれていた「盛り」な女が、「伊予の若妻」と呼ばれるようになってしまった、その思いは——。

源氏の供人が「気高くとまっている女がいる」と言っていたのは、この女のことで——それも分かる気がする。

「女」として最高の地位を手に入れる寸前にまでいった若き女が、父の死によって後見を無くし、父娘ほども歳の離れた好色な老いた男に——「伊予の介」などという、実父よりも数段格下の地位に甘んじている年老いた男の下に嫁がねばならないとは——。

——全ては生活のため——生きるため——。

——そう割り切れるものでもあるまいに——。

源氏の思いに——しかし、同情の念は少なかった——。

伊予の介は、その呼ばれ名のとおり、伊予の国の「介」——つまり地方行政の次官である。

つまりその歳になっても「介」の地位しか手に入れることのできなかった——息子には、紀伊の「守」——つまり長官として既に追い抜かれている——。

息子の任地である紀伊国よりも遠く、倍以上の日数を船に揺られなければ辿り着けぬ「辺境」の——しかも「介」でしかない。

国主である「守」というのは「おいしい」役職である。行政長官としてだけではなく、司法さえも手中に収め——そして何よりも租税の徴収権を一手に引き受けている。

だからこそ「おいしい」のだ。

租税率に僅かな水増しを加え、着服する。

豊かな国であればあるほど、自分の懐に転がり込む金も多くなる。

無論、合法的なこととはいえぬ。

しかし、司法——時には軍事さえも牛耳っているから、何人も文句は言えない。

中央にさえ、ばれなければよいのだ。

いや、ばれたとしても、その人脈金脈を以て、もみ消せばそれでよい。

「それさえ」もできない無能者に国主を務める資格はない。

財を貯え——財を育て——その財力を基に中央政界へとの上がる。

財力にものを言わせ、朝廷に金品、資本を、提供し、中央への「貢献度」を上げ、その「貢献度」の有無、多少によって中央の官職を得るのだ。

体のいい「売官制度」でしかないが、それを問題にする者はいない。

だからこそその「平安」ではないか——。

そして、伊予の介は、それさえもできないのだ。

息子である紀伊の守は、未だ若く、また、その若さで「守」であるから、彼の手腕によってはそれなりの栄達も叶おう。

財力と人脈を最大限に利用し、「男」としての地位を上げることも可能である。

しかし、伊予の介は既に年老い、しかも「介」でしかない。

——これ以上、上ることの出来ぬ男——。

そして、そんな男の「若妻」となってしまった女は——。

上ることを——少なくとも上ることの機会が与えられることを——約束されていた女が、そんな男の後妻におさまるなど——。

——女は——自分の運命をやすやすと受諾しているのか——？

源氏は意地悪く想像する。

——女よ——その不満を——その不安を——汝は、その「内」に閉じ込められているのか——？

——この私を前にしてもなお——。

——私が——試してやろう——。

「男と女の仲ってというのは、どうも分かりづらいものだね」

年下の源氏が、大人ぶってそう呟いたのを、紀伊の守はどう受け取ったろう。

「私の継母である女と父との縁談も、突然湧いてでてきたものですから、世の中、そういうものでございましょう。

今も昔も『定まりきった』ことなどないのかも知れませぬ。

それに、そういうのでも特に『女の宿世』というのは『浮かびたる』というものだからこそ、趣があるものでしょう」

紀伊の守は、口に出してはそう言った。

「伊予の介は、その若妻をさぞや大切にしているんだろうね。逆に『ご主人さま』って感じじゃないの」

「それはもう。おっしゃるとおり、傍から見ていると『自分のご主人』と考えているんじゃないかと思えますよ。

実の父ながら……いや、実の父だからでしょうか、『好色がましい』と……。

私をはじめ、伊予の介の子は皆、この婚姻を承知したわけではあるませんし」

紀伊の守が苦笑する。

「まあ、しかし、あの伊予の介が、その若妻を、いかにも『似合っている』っていう、今風の君達のような若者に下げ渡すとも思えないね。

かの介は、結構『いける男』っていうもっばらの評判じゃないか」

と、源氏は笑った。

「父も、今は任地の伊予国に赴いておりますから、今頃何をしていることやら……」

紀伊の守も肩をすくめるように苦笑する。

「——で、その若妻、どこにいるの？」

源氏が、さりげなく訊く。

伊予の介の邸での凶事がおもわしくなく、その家の者たちがこの紀伊の守の邸に来ているというのだから、その若妻もこの邸にいるはずだ。

「たいていの者は召使の住む『下屋』に下げさせましたが——全部は下がれないでいると思います。下屋は狭いところですから——」

源氏のさりげない問いに、紀伊の守はさりげなく答える。

紀伊の守は、源氏の言わんとしていることを——源氏は紀伊の守が言わんとしていることを——正確に把握していた。

——中の品の女が——いる——。

源氏は表情も変えずに、ほくそ笑んだ。

酒がまわったのか、供人たちは、源氏のいる廂間の周囲の濡縁である「簀子」で、皆、寝始めていた。

寝殿は、最も内側に、周りを格子に仕切られた「母屋」と呼ばれる部屋があり、その外側を口型状に囲んだ細長い「廂間」という部屋があり、いちばん外側を「簀子」と呼ばれる濡縁に囲まれている。

静寂のなかに、水の流れだけが涼しい。

だが、帯や紐を緩めても、源氏は眠りにつくことができなかった。

「虚しい独り寝か……」

そう思っているとますます目が冴えてくる。

「水でも——」

そう思い立ち上がると、東半分のこちら側と西半分とを分けている襖障子の向こうから——そう、少し離れた北西の方から人の気配がする。

——まあ、人のいるのは当たり前か——。

そう思い、

——あの若妻か——？

その根拠のない直感を、源氏は信じたくなかった。

——もし、そうなら——おもしろい——。

魅かれるように起き上がり、そっと、襖障子に隔てられた東半分の、廂間から母屋に移り、襖障子に聞き耳を立てた。

廂間と違って風も届かず暑さが気にならないではなかったが、人の気配は近くなる。

どうやら、西側の母屋に誰かいるらしい。

夕方に紀伊の守に紹介された、伊予の若妻の弟という少年——紀伊の守は「小君」と呼んでいただろうか——の、幼い、よく通る声が聞こえてきた。

「ねえ……もし……何処にいるの……？」

小君の、子供らしい不安げな、抑えた、それでいて可愛らしい声が聞こえてくる。

「ここにいるわよ……。」

客人は、もうお眠りになったのかしら。

どんなに近くにいらっしゃるのかって思ってたけど、結構離れておられるようね……」

女の声がする。

すでに寝ていて小君の声で起きたのだろう、けだるそうな調子の方が、小君の声によく似ている。

——やはり——。

源氏は確信した。

——小君の姉——伊予の若妻か——。

——汝はそこに居るのか——

——中の品の女——。

源氏は、音もたてずに立ち上げる。

「東側の廂間で御眠りになってるみたいですよ。

夕方、世間の名高い御姿を拝見したけれど……ほんと、すごくかっこいいんだよねえ」

と、小君が話している。

小声で言っているつもりらしいが、興奮していて声が高い。

それに答える女も、寝ぼけていて声の調子が大きく、障子一つ隔てただけの源氏に気づいていない。

「昼間の明るいときだったら、覗いてでも拝見するのだけれど……」

いかにも眠たげな女の声が、源氏の癪にさわった。

（もっと気に入って小君の話を聞いて欲しいもんだ……私はその程度の男か……？）

と、独りでむくれている。

「僕、寝殿の端っこで寝ておくよ……今日はほんと疲れた」

小君は場所を移るために、明かりをもって去っていったようだった。

「……中将は何処に居るの？」

周りに誰もいないから、ちょっと怖いわね……」

先程と変わらず、障子向こうの北西のほうから、伊予の若妻の声が聞こえる。

「中将」とは、伊予の若妻の側付の女房の呼び名であった。

——私がこんなに近くにいるではないか——近衛の『中将』たる私が——。

源氏のこの世のものとも思えぬ美しい瞳が、妖艶な光を放つ。

「中将なら、下屋にお湯を使いにながら下がっておられて、『すぐに帰って参ります』ってことでしたけど……」

母屋の周りにある廂間から、他の女房たちが答えた。

——女は——そこに臥している——

——ただ独りで——。

すぐに、全ての者が——源氏以外の全ての者が寝静まった——。

女との間を遮っている襖障子に掛かっている掛け金を外し、試しに襖障子を引いてみれば、何の抵抗もなく開いてしまった。

——向こう側の掛け金が掛かっているものだと思っていたが——。

女どもは、予想以上に不用心であった。

——それとも——。

襖障子を開けると、すぐ目の前に几帳が立ちはだかっていた。

几帳の向こうには、芯を押さえた灯が仄かに立っているだけで暗いが、闇に慣れた源氏には、それで充分だった。

脚の付いた唐櫃のような箱がそこかしこに置かれ、足元がごたごたしている。

静かに、音もたてず、廂間にいる女房たちに気づかれぬよう——しかし、女には分かるように、源氏はその中を踏み分けていく。

——女が——いた——。

伊予の若妻であろうことは一目で分かる。

西側の母屋に独り、小柄な感じで臥し——そして、美しい。

ほのかな明かりに浮かぶその寝顔は、かつては入内を目指した女の、美しさをもっていた——。

源氏は伊予の若妻の横にしゃがむと、女の上にかけてある煩わしい衣を傍に押しやってしまう。

夏の最中、若妻の上にかかる衣は少なく、それを押しやると身につけた薄い衣は暑さのために艶めかしくはだけ、女は裸同然になってしまった。

女がやっと、はっと気づく。

足音には気づいていたものの、その方向がはっきり分からず、それは女房の中将が帰ってきたのだと思っていたのだ。

「『中将』をお呼びになっておられましたので——。

貴女のことを、人知れず御慕いしていた甲斐がございました」

女は何が起こったか分からず、反射的に上体を起こしたが、源氏がすぐに女の上体を後ろから抱きすくめ、伊予の若妻の動きを止めてしまった。

あまりの出来事に、さすがに目を覚ましたのだろう。

——そして、気付く——。

——今夜、この邸にいる男の『中将』と言えば——近衛の中将——かの光君しかおらぬではないか——。

何かに押さえつけられたような衝撃が伊予の若妻の体中を走ったことを、抱きすくめる女の震える両肩と汗のにじむ首筋から、源氏は知った。

「や……」

怯えたように、女は初めて声を出したが、後ろから抱きすくめる源氏の袖衣が女の口を塞ぐようになっていて、人の耳に届くものではなかった。

「不意に思いついた出来心でこんな事をしているのだと、お思いになっても致し方のないことですが、私のこの決意は、そんな出来心などのようなものではありません。

長年、貴女を御慕い申し上げておりました私のこの思いを、貴女に直接申し上げたくて、こうして我が身を省みず参上した次第です。

私が、こうして貴女とお近づきになる機会を、今か今かと待っておりましたこの苦心からも、私の貴女への思いが、決して気まぐれで浅はかなものではないことを、聡明な貴女なら分かっていたいただけるはずですが——」

源氏はもの柔らかに——嘘をつく。

——鬼神さえも感じ入ってしまうほどの美しい光君が——自分を抱きすくめている——しかも、これまでに感じたことのない優しさで——。

その事実と、また自分のこの裸同然で男に抱きすくめられている状況を考えれば、むやみに、

「ここに……誰か人が」

などと騒ぎ立て、不用意に周りの者を起こすこともできない。

伊予の若妻は、心内侘しく、困惑の色を隠せない。

(——このようなあるまじきことを——これでは不倫——そのようなあさましいこと——)

「お……お人違いでございましょう……？」

伊予の若妻は、それだけをやっと言葉にし、源氏の腕から抜け出そうとするが、その女性的な源氏の腕は思いのほか力強い。

消えてしまいそうほどに取り乱した女の様子が、痛々しいほど可憐で、

——いい——。

源氏は、女を抱くその腕に力を込めた。

「間違えるはずがありませんや？」

これほどの貴女への思いを道しるべとしているのに……。

この私の思いをお疑いですか——？

そんなに好色めいたことをしそうに見えますか？

先程から、私のほうをご覧になってくださらないのに——。

私はただ、この思いを貴女に聞いていただきたいだけ……」

そう——そして——貴女が欲しい——。

源氏は、そのあまりに小柄な女を軽々抱き上げてしまう。

女は拒絶する暇もない。

抱き上げられた伊予の若妻は、薄明かりのなかに初めて、源氏の顔を見た。

——何と——美しい——。

源氏の芳顔に見入ってしまった自分に気付いていたが、その視線を源氏から離すことができない。

衣のはだけた裸同然の淫らな姿も源氏に見つめられている今では——。

快く体の局所が熱くなるのを感じながら、しかし、女の理性がその思考を現実に戻した。

——私は何を——いけない——光君だからこそ——。

女の思いを知ってか知らずか、源氏は女を抱き抱えたまま向きを変えた。

源氏は自分が出てきた障子から、東側に女を連れ出そうとした、まさにその時、さきほど伊予の若妻が「中将」と呼んだ女房が帰ってきたようだった。

「これ」

源氏は、大胆にも中将を呼んだ。

中将も変に思ったに違いない。美しい声ではあるが——男の声なのだから。

今まで明るい所にいたのだろう、薄明かりしかない部屋のなかを手探るように歩いてくる。

そして、源氏の着物の薫りが顔にくゆるほどになって初めて、事の重大さに気付いた。

目の前に、自分の主人を抱き抱えた男が——その美しさや衣装から一目で世にも名高い光君と分かる男が立っているのだから——。

思いがけない出来事に、

「これは……どういう……え……」

動揺するばかりで、言葉が出ない。

相手が並の男ならば、女ながらにも手荒に力づくでも主人を取り返ししよう。

しかし、ここに主人を抱いているのは、かの光君なのだ――。

かの光君が――。

ただでさえ人に知られては困るもの――まして――。

中将のあわてぶりも意に関せず、源氏は、東側に伊予の若妻を連れていこうと歩きだす。

中将も、他にすべきことを思いつけず、ただその後をついていこうとすると、源氏は平然と寢所へと足早に行ってしまう。

それについていこうとする中将の前に、源氏は立ちはだかるように障子を引き立て、中将の動きを制し、西側に戻るよう命じた。

「夜明けになったら、お前のこの女主人を迎えに参れ」

――それまでは、私のものだ――。

源氏は、女主人を抱いて、闇の中へと消えてしまった――。

——源氏の捨て台詞を、中将はどう受け取ったろう——。

伊予の若妻は、そう思う自分が馬鹿げてみえた。

——間違えようがないではないか——

——男が女を抱きかかえ「夜が明けたら」などと言うのを聞いて、他に何と解釈しよう——。

そう思うと死ぬほど切なく、汗を流すほどに気分も悪くなる。

女の肌に触れた源氏の手には汗が伝わり、その流れを追うように動く源氏の指に、女は過敏に反応した。

そんな女の様子が愛おしい。

源氏は——どこからそんな言葉が生まれてくるのか——次々と優しい言葉を女にかける。

女は、源氏のその美しい声と優しい言葉に、感じ入り、身を任せてしまいそうになるのを、必死に堪えていた。

気を緩めれば、そのまま自分から源氏の首に腕を回してしまいそう——。

——私が——光君などと——。

その思いが、女にはまだ強い。

「現実とも思えません。

このような下賤の私ですが、このような事をなされた貴方様のお気持ちを、どうして『あさはかなこと』と思わずにおれましょうや。

私のような身分の者には、その身分に相応しい『際』というものがあります。

ですから、貴方のような方と——」

源氏の我を通した行為に、女は困惑していた。

——伊予の若妻となった自分が光君と関係をもったとなれば——。

——そして、それが、夫の伊予の介や世間に知られるようなことになれば——。

そう思うと、この源氏の情の無いなされ様が悲しい。

そして、源氏はそんな女の様子が愛おしく、さすがに引け目を感じた。

そんな女を——そして自分を慰めるように、源氏は言の葉を紡ぎだす。

「そういう『身分の違い』など、私には分かりません。

こんなふう to 女性に思いの丈を伝えるのなど、初めてなのだから。

それをかえって、そこら辺の浮気者と同じように思われるのなんて……ひどいですよ」

床に寝かせた女の頬に、いたわるように指先で触れる。

「私の噂なら、今まで何かとお耳に入っているでしょう？」

ならばご存じのはずです。

私が今まで『何が何でも』と無理に好色な振る舞いをしたことなどなかった、と——

そう、『何が何でも』と思わせる女性などいなかった——。

でも、貴女は違う。

何かの前世からの因縁でしょうか——本当に、こうして貴女に非難されても仕方のない行為をしてしまうほどの狂おしいこの思いを、自分でも不思議で、どうすることもできない——」

源氏は、真面目にいろいろと話すが、女はなかなか心を開かなかった。

或いは——おそらく——女は源氏の嘘を見破っていたのだろうか——。

——『何が何でも』と思った女が——狂おしいほどに思った女が——自分が初めてなどではないことを——。

——伊予の若妻である自分などよりも、もっと以前から——もっと狂おしく思っている女性が、源氏の心の奥にいることを——。

——自分が、「中の品の女」という、只の「人身御供」でしかないことを——。

——どうして私は——。

伊予の若妻は悔やむ。

——どうして私は——光君の姿を見てしまったのだろう——と。

——あの姿を——あの神々しいまでに美しい御姿を——。

——あの姿さえ見なければ——もっと強く拒むこともできるように——。

女は、全て身をまかせることも——かといって、強く拒むこともできず、事実、その躰は、理性とは反して、源氏のそれを卑しく求め——目を閉じ、細い手で顔を覆った。

——光君の姿を見ぬように——そして、自分の止めることのできぬ、溢れ出る淫欲な感情が顔に出るのを見られぬように——。

女は、人妻である自分が、どうしても己の肢体を源氏に許してしまっていることが辛い。

——人妻でなければ——。

——そう——私が人妻でなければ——。

——こんなに苦しい思いをせずすんだのに——。

——しかし——もう遅い——。

女は、胸元に感じる源氏の吐息と、局部に感じる源氏のその熱さに溺れそうになりながら——思う。

——こうなれば——。

——そっけのない、いやな女と思われようとも——。

——情けを解さぬ——話の分からない堅い女として、押し通そう——。

——自分が「求めている」と感じ取られないようにしなければ——。

女は、源氏の話しかけにも答えず、つれない。

もともと、おしとやかな性格である女が、強いて心を張り詰めている様子は、細く、しなやかな「なよ竹」のよう——。

さすがに、すぐには折れそうもない。

女は人妻である自分が、源氏の優しさの溺れそうになるのが心やましく、源氏の我を通したこ

のされ様を、「いふかいなし」と思って悲しむ様子は、本当に「あはれ」と源氏に思わせた。

——だが——。

——こんなにか弱げな貴女を見れば、心苦しいけれど——。

——だからこそ——そんな貴女の美しさを目にして、何もせずにといたら——私はきっと悔いを残すことだろう——。

——汝をもらおう——中の品の女よ——。

女は、源氏の美しい肢体が、自分の体を透かしたように思えた。

——可哀相なことをしてしまったろうか——？

——いや——

——ここでこの人に何もしないですましていたら、私はきっと悔いを残していたろう——。

源氏は、そう自分に言い聞かせていた。

横にいる伊予の若妻は、気持ちの晴らしようもなく、憂しなる様子でいる。

結局この女は、その感情を、顔を覆った手の内に隠してしまった。

さすがに抑え切れずに漏れ聞こえる女の喘ぎ声も、泣いているようにさえ聞こえた。

「何故に、それほどまでに、私を嫌っておられるのですか？

思いがけずこのようなことになってしまいましたのも、かえって、私たちのあいだに浅からぬ前世からの因縁があったからだと思いになれませんか？

貴女が『男女の事』も知らぬ生娘のように、思い沈んでいらっしゃるのが、私は辛くてなりません」

源氏は、自分の恨み言がきつい口調になっていることに気づき、言いすぎたかと思った。

女も、そんな源氏の様子に気づいたのだろう。微かながらに言葉を漏らす。

「このような身でなく――

『介』の妻などに定まっておらぬ『ありしながらの身』――そう、昔のままの娘の身で、貴方様のこうしたお情けにあずかるのでしたならば――

自惚れででも、『いつかは浮気ではなく、お気が変わって本気になってくれるかも知れない』と、自分を慰めることもできましょうが……」

女は、

――とり返すものにもがなや世の中を
ありしながらのわが身と思はむ――

あの頃の二人に戻りたいわ。
私はあの頃のまま、と試してみたいもの」

という歌に因って、話したのだった。

女は続ける。

「でも――でも、今は違います。

これが、一時のかりそめの逢瀬だと――

美しい水鳥が水の上に休む『浮寝』と変わらぬことを、私は分かっているのです。

だからこそ、私はどうしようもなく悲しく……。

仕方ございません。

『今は見きとなかけそ』――今となっては、逢わなかったものと、どうか私をお忘れくださいますよう……」

女は、

――それをだに思ふこととてわが宿を

見きとな言ひそ人の聞かくに――

せめて、私を思ってくださいますなら、
私を逢ったということを誰にもおっしゃらないでください。
人が聞くでしょうから――

という古今集の歌に準えて言い、また悲しみに沈む。

――ほんとに、この人は「理なり」――。

源氏は、並々ならず行く末を約束すること、少なくなかった。

鳥も啼いた——。

人々が起きてくる。

日はまだ上がっていない。

いまだ、暗闇が天空の多くを包み込んでいる。

「ひどく寝坊しちゃったな。

光君の車を引き出してこようぜ」

供人たちが会話を交わし、源氏の帰り支度を始めている。

人々の動きに、紀伊の守も起きい出てきたようだ。

いろいろと指図を与えている。

「女性の方達えならともかくさあ。

こんな暗いうちにお帰りになることもないでしょう？」

源氏の供人か、紀伊の守の家の者かは分からないが、そんなことを言っている者もいた。

源氏の腕のなかには、まだ女がいる。

心は未だ許していないようであるが——こうして体を源氏に預ける女がいじらしい。

女の頬に再び触れると、女ははっと身を縮めた。

供人たちが騒いでいるのを気にしているのだろう。

たしかに、このようなところを見られては、この女にとっては大変なことに違いない。

といって、すぐにこの女を離してしまう気には、源氏はどうしてもなれなかった。

——この人とは今度はいつ会えるだろう——。

——もう一度、こんな機会があろうはずもない——。

——わざわざ用もなく紀伊の守や伊予の介の邸を訪ねるわけにも行かぬ——。

——文のやりとりなど、とても無理だ——。

この女とのつながりが切れてしまいそうなことが、源氏にはとても辛い。

寝殿の中央で東西に分けている襖障子が静かに、わずかに開いて、その向こうから——もとの女のいた西側の母屋から、伊予の若妻につく「中将」が顔を出す。

「あの……外の者たちも起きはじめました。

人目につきます前に、どうかご主人様をお返しく下さいませ……。」

中将の声は、困惑に満ちていた。

伊予の若妻を抱いていた腕を離し、女を自由にはしたが、少ない衣を胸に抱いて向こうに消えようとする女の腕を再び引き寄せた。

「これからは、どう貴女にお便りしたら宜しいのですか？

男女の仲にはないような貴女のその御心のつれなさも、あはれも——浅からず私の心に残る二人の思い出は、そうあるものではない——」

源氏は、女の手を取り泣いてみせる。

そんな源氏の様子も、この世のものと思えぬ美しさ——。

女は、自分の腕を握りしめる源氏の力が緩んでしまいそうになるのが、何故か不安に思え、自ら源氏の手をつなぎ止めようとしてしまう。

鳥が、再び啼いた——。

人の動きもいっそう騒がしくなる。

人影が近づくたびに、女は落ちつかない。

源氏も、さすがにこれ以上女を引き止めるわけにはいかなかった。

「——つれなきを恨みも果てぬしののめに
とりあへぬまでおどろかすらむ——。

貴女のつれなさに恨み言もいい果てぬまま夜は白み——、
どうして鳥は、取りもなおさず私をせきたてるのでしょうか——」

源氏が女に歌いかける。

しかし女は、自分を見つめる源氏の美しさを見るにつけても、不似合いな感じがする。

——伊予の介の後妻となった自分の境遇、年齢、容貌——。

そんな自分の身のありさまを思うと、本当に不似合いで恥ずかしい。

こんな惨めな自分への、身に余るほどの源氏のもてなしが、何とも言えず——嬉しい。

伊予の介の下に嫁いでどれくらいになったろう。

自分は、いい妻ではない。

そんなことは知っている。

特に、嫁いだ時分は、

「参内を目の前にしていた自分がこのようなところに——」

そう思っていた。

伊予の介も、普段はそっけなく、自分のことを気に食わないらしく馬鹿にしている。

だが——。

だからといって——いや、だからこそ、あの夫がこのようなことを許すとは思えない。

夫のいる伊予の国が思いやられた。

ある人について思い悩むと、自分の魂が体を離れて、その人の夢に現れるという。

これほどに夫のことを不安に思えば、自分が夫の夢に現れるかもしれない。

そうなれば、なにかあったのではないかと、夫が怪しむに違いない——。

そう思えば、空恐ろしく気が引ける。

「——身の憂さをなげくにあかである夜は
とり重ねてぞ音もなけれける——

私の身の情けなさを嘆き飽きないうちに、明ける夜には、
鳥の声にとり重ねて、私も声をたてて泣けてきます」

女は、再び顔を覆った。

中からでも分かるほどに、外はどんどん明るくなってきていた。

源氏は、女を障子口まで送った。

内も外も、人騒がしくなり、女が西側に渡るとすぐに、障子を閉めて別れた。

女が障子の向こうに消えてゆき——心細く——その障子が二人を隔てる逢坂の関のように思えた。

汗に濡れた寝衣を脱ぎ捨て、平常服である直衣に着替え、南に面した簀子の欄干で、暫くのあいだ、外を眺めていた。

西側にいた少なからぬ女たちも、源氏が外に出てきたのが分かったのだろう、西のほうの格子が慌ただしく、しかし僅かに開いて、その間から女たちが源氏の姿を覗き見ている。

東西を分けている簀子の低いついたてからの上から僅かに見える、源氏の類稀な美しい容貌をぞくぞくする思いで眺めている。

「すきものの女たちが……」

源氏は、冷たく女たちの視線を無視した。

あの女は——見てはいまい。

格子の奥で、恐れを抱いていることだろう——。

自分の冒した罪に——

そして、それを受け入れてしまった自分に——。

——私は、貴女を手放しはしない——。

今は月の終わり――。

夜が明けても、月が有明として空に残っている。

闇夜の時ほどの光芒はないけれども、月の表はくっきりを見せて、なかなか趣のある曙である。

無心な空の景色も、見る人次第で、色めかしい感じにも、もの悲しい感じにも見えるものだ。

人の分からぬ源氏の心は、胸を痛め――伊予の若妻と連絡を取る手だても見いだせぬまま、後ろ髪引かれる思いで、紀伊の守の邸を後にした。

まもなく邸に帰り着いた。

疲れがないわけではなかったが、直ぐに微睡むことはなかった。

伊予の若妻のことを思い起こす。

再びあの女と会う手だてもなく、まして、あの人の心中を思えば、いかばかりかと気の毒な思いがする。あれほどまでに義理堅い女であれば、自分の冒した罪の重さに、あのか弱げな細い体は押しつぶされんばかりであろう。

――あの女のことを思えば――。

――特に優れたところがあるわけではない――。

――宮中への参内を目指したほどの女であるから、美しいには違いないが――。

――「あの人」と比べれば――。

――だが、感じのよい嗜みを身につけていて――いい――。

——ああいうのを「中の品の女」というのだろう——。

——さすが、馬の頭は隈なく女を知っている——なるほど——。

源氏は一人納得していた。

数日が経ち——。

このころは、源氏は左大臣邸によくいるようになった。

あの伊予の若妻のことが忘れられず、たびたびぼんやりし、側付きの女房などがいろいろと言
い合っているようだ。

妻である葵の上は、最低限の妻としての仕事をこなすばかりで、後は奥に下がってしまった。

あれから、あの女とは文さえも交わしていない。

交わせるはずもない。

それほどまでには、源氏は大胆にはなれなかった。

自分のことだけならば何ともなろうが、あの「なよ竹」のような若妻のことを思えば、変な噂
がたつようなことはしたくない。

——あの女は、どんなに思い悩んでいることだろう——。

女のか弱げな様子を思い出せば、哀れにさえ思えてくる。

——あの女が悩んでいることは、私との不実があったことなのか——。

——それとも、あの夜のことが、不実であったことなのか——。

あの女にとっては、源氏が再び自分に近づくことは許されないことなのかもしれない。

本当にあの女のことを思えば、もう会わないほうがいいのだろう。

だが、源氏は自分の思いを抑えられなかった。

——もう一度——中の品の女よ——。

源氏は、思い悩んだあげく、紀伊の守を左大臣邸に呼んだ。

紀伊の守が、いつかのように、早速訪れる。

源氏の前で畏まり、方違えの件でなにか落ち度があったのかときがきではないようだ。

「今日は他でもない。

卿の邸に、故衛門の督の末の子がいたよな。

『小君』といったっけ？

君の継母にあたる人の弟。

あの子を私に預けないか？

可愛らしい子だったし、頭も賢そうだ。

私の側に仕えさせて、後々には私が後見となって殿上童として、参内させよう。

あれほどの子を埋もれさすのは忍びないからね。

故衛門の督も、そう望んでいたのだろう？」

と、源氏は言っのけた。

——偽善だな——。

そんなことは、十分承知していた。

あの小君という子供を自分は、自分の下心のために利用しようとしているのだ。

「恐れ多いことです。

有り難い仰せですが、私の一存では決めかねます。

小君の姉である義母に、その仰せをお伝えいたしましょう。

きっとすぐに承知することでしょうが……」

不意に女のことが話にあがり、どきりとしたが、紀伊の守に深意はないようだ。

「その小君の姉——君の継母だが——子を……君の義理の弟を、伊予の介との間にはもうけているのか？」

何気なく——そう何も深意がないが如くに——源氏は訊いた。

「そういうことはございませんね。

ここ二年ばかり、結婚してからというもの、あの継母のほうも

『入内を望んだ父上の意向とは違ってしまった』

と思い嘆いておるようでして。

伊予の介も、継母のそういう所を不満に思っていて、大切にはしていますものの……いわゆるそういう意味での夫婦仲はうまくいっていないと聞いております。」

「気の毒にな——」

そう言ったことが、女についてのことであるのか——源氏自身も分からない。

「相当な器量のよい女性だとの評判だけれど——本当のところは、美しいのかい」

源氏は、何も知らぬかのように訊いた。

「そうですね。

悪くはないのでしょう。

夫婦仲が良くないにも関わらず、父の伊予の介が義母に暇を出さないのは、そういうことがあるからではないですか？

義母のほうも私に対してもよそよそしい態度ですし、継母と継子との仲がいいのは、父子の仲違いのもとになると昔から申しますから、私もよくは知らないのですが——」

紀伊の守は、ため息まじりにそう言った。

源氏は、正直安心していた。

この男が、自分と伊予の若妻との仲に気づくことはないだろう。

もし、知っていてこんなふうに話すのなら——それもそれで安心であった。

——よし——。

源氏は、不埒に呟いた。

それから五、六日経って、紀伊の守が小君と呼ばれた少年を連れてきた。

「非の打ち所のない美しさ」を持っているわけではない。

だが、優雅な物腰で、上流の子弟らしい振る舞い。

そんなところも、姉である伊予の若妻に似ている。

源氏は、小君を近くに呼んで、優しく語りかけた。

小君も子供ながらに、世にも名高い源氏の君とこれほど親しく話せることのすばらしさが分かっているようだ。

源氏は、小君に、姉である伊予の若妻のことを色々と詳しく訊いた。

小君も、生真面目に答えられることは全て丁寧に答えてくれる。

源氏は、この少年を利用して再びあの女とつなぎをつけようという邪な思惑もあって、この小君も素直さに気が引けてくる。

だが、この小君にはこれからも色々と役に立ってもらわなければならない。

事情を知ってもらわなければ、何かと不都合である。

源氏は、それとなく、伊予の若妻と自分との間のことを、子供の小君にもわかるように、易しく話してやった。

小君も賢い子供で「男女の間のこと」も「それなりに」知っていたのだろう。

「光君と姉上との間に、そんなことがあったのか」

と、それとなく分かった。

意外なことではあったが、子供である小君は、それほど深くは考えなかった。

小君が紀伊の守邸に帰るとき、源氏は女への文を小君に託した。

小君は、はっきりとはその文がどういうものか分かっていないようだが、大事なものであることは察したらしく、

「誰にも見られぬよう」

という源氏の言葉を守り、懐に大事そうにしまった。

紀伊の守邸に着き、姉のもとに帰った小君は、早速、源氏からの文を伊予の若妻に手渡した。

——女は、涙を流したのだという——。

——嬉し涙——か？

今でも、源氏には分らない。

だが、そう信じている。

前にいる小君が、涙を流す姉を見て、きょとんとしている。

「この子がどう思っていることだろう」

と、気恥ずかしくなったが、かといって手紙を突き放せるわけもない。

顔を隠すように、手紙を広げた。

源氏の面影を映すかのような美しい書体で、思いのたけがこまごまと一面に述べられている。

「——見し夢をあふ夜ありやと嘆くまに

目さへあはでどころも経にける——

先夜の夢——貴女との逢瀬の夢が、現のこととなって、

貴女に逢える夜があるのだろうか」と嘆く間に、

瞼さえ合わない——目も閉じれぬ——眠れぬままに何日も過ぎてしまいました」

などと歌が詠まれ、女の胸を締めつける。

最後に

「寝る夜なければ」

と、

「——恋しきを何につけてか慰めむ
夢だに見えず寝る夜なければ——

この貴女への恋しさを、何をもって慰めればいいのでしょうか。
夢で貴女に逢うことさえできない——貴女を思って夜も眠れないのだから——」

という拾遺集の源順の歌を引用してあるところなど、心憎い。

素晴らしい文の内容に、女は目が涙で曇ってしまう。

——こんな身に落ちぶれてしまってから——

伊予の介などという老人の妻となってしまうから——

あの光君と出会うなんて——。

——入内を目指し、それを間近にして父が逝去し——

今の夫に嫁いでから、あの方に愛してもらえるなど——。

——なんと、私は運のない女のだろう——。

そう思いつづけて、女はやるかたなく臥すしかなかった。

翌日、再び小君への源氏のお召しがあった。

小君は、源氏への返事を姉に乞うた。

「『あの文を読むに相応しい者などいなかった』と、光君に申し上げて」

女は、そっけないふりをしてそう言った。

「間違えようもなく『姉上に』っておっしゃったのに……。

どうしてそんなこというの」

小君は、子供っぽく笑って訊いた。

——ああ——。

源氏が、二人のことを小君にすっかり話してしまったことを察した。

心やましくも思え、つらいこと限りがない。

「もう……。

ませた口をきくものじゃないわ。

それなら光君のところには参上してはなりません」

女は、自分の当惑を隠すために機嫌を損ねてみせた。

「お召しがあったのに、そんなわけにはいかないよ」

小君は、結局返事をもらえぬまま、源氏のいる左大臣邸に向かった。

小君を連れてきたのは、やはり紀伊の守自身であった。

——ほう——。

源氏は、意地悪く紀伊の守の顔を伺った。

——この男——なんかかんかと言いながら——

——あの女に——自分の継母に、気があるな——？

呆れたように鼻で笑った。

父である伊予の介を馬鹿にしていながら、よく似ていることだ。

この有能な男も、結局は只の好き者なのだ。

年若い美しい女が、年老いた父親の妻であることを、さすがにもったいないと思っているのだろう。

小君を大事に扱い、小君を自分の邸に引き取っていたのも、こうしてわざわざ自分が赴いて小君を送り迎えするのも、あの女の気を引きたいがためなのだろう。

——まあ、いい——。

——あの女が、こんな男になびくはずもない——。

——あの女はもう——この私を知ってしまったのだから——。

源氏は、小君を側近くに呼んだ。

「昨日は結局帰ってこなかったね。

待ってたんだよ？

どうも私とは仲良くしてくれないのかい？」

源氏が悪戯っぽく恨み言を言って小君をからかうと、小君は顔をただただ赤らめる。

そんな小君が——姉の面影を見せてくれるこの少年が、源氏は気に入っていた。

「それで？」

源氏が女の返事のことを小君に尋ねると、邸での一部始終を源氏に話す。

「だめだなあ。

うん……どうしようか……」

源氏は、再び小君に手紙を託すことにした。

「お前は知らないんだろうね」

源氏は、小君を側に引き寄せた。

「私とお前の姉上とは、あの伊予の御老体よりも前から知り合っていたのだよ。

けれど、私は頼りがいのない、ただの細顎の青二才だと、お前の姉上には思われたらしい。

あんな……というのは言い過ぎかな……まあ、あの御老体を夫としてしまわれて——

私も見くびられたものだね——あてつけなのだろうけれど。

けれどね、お前は私の子供のつもりでいてくれていいから。

あの『頼りがいのある』年寄りも先は長くないだろうし——」

源氏は、何も知らない小君に或ること無いことを植えつける。

小君が、生真面目に、

「そうだったのか——

そういうことかもな——

奥が深いな——」

などと、大人の世界についていろいろと考えている様子が、源氏には微笑ましく、おかしい。

源氏は、小君が心底気に入った。

それからというもの、小君を片時も側から放さない。

内裏に参内するにも連れて歩いた。

内裏を真似て「御匣殿」と呼んでいる自邸の衣装係に命じて、装束等も調達させて、本当の親代わりのように世話をした。

打算がないと言えば嘘になろう。

この小君を世話することで、伊予の介や紀伊の守の、「無能さ」や「甲斐性のなさ」を、わざと見せつけているのだから。

世間に。

そして、「あの女」に。

女への文は、小君に託し、毎日のように女のもとに送った。

女は、その文を全て、何度となく読み返す。

光君の手紙を——自分などを忘れることなく文を送ってくれる源氏の気持ちを嬉しく思うけれども——。

なんといっても小君はまだ幼い。

本人は一人前のつもりで光君のお仕えとしての役目をこなしているが、何の拍子にあの手紙が人目に触れるか分からない。

そうなれば、尻軽な女と評判をたてられることになるだろう。

不倫だけでも許されぬというのに、伊予の介の後妻として落ちぶれた我が身が、光君と関係を持つなど——なんと不相応なことなのだろう——。

光君の愛情を受けることは、望んでも叶うものではない。

光君の愛情を受けることになったならば、一人の女としてはこの上ないほどの吉事であるに違いない。

だが――。

世間には「いいこと」というものが、身の上次第になるものがあるのだ。

私は、このことを素直に喜んではいけない――。

結局、源氏からの文に、女が返事を出すことはなかった。

あの夜――。

女は一人、顔を赤らめている自分を知っている。

あの夜、僅かに見た源氏の類稀な美しさが、本当に――並のものであろうはずがない。

そう思い出すだけで胸が熱くなり、体がうずき、手が指が勝手に動き、独り自分を慰める。

しかし、いまさらに、色気を出して手紙の返事をだし、情を解する女を振る舞ったところでどうなるというの――。

女は、自分のしがたい運命に、このまま埋もれてしまう決意をしていた。

女の思いをよそに――源氏は女のことを思い、忘れる間もない。

心苦しく――恋しい――。

女の、あの思い悩んだ様子への愛おしさも、記憶から払いのけることなどできない。

いっそ、軽々しく人の出入りに紛れて、あの女のもとを訪れようとも思ったが、人目について、不都合な行動が人に知られることになれば、あの女をまた困らせることになってしまう。

女のためにも気の毒で、思い煩いつづけていた。

間もなく、源氏は例のごとく宮中で何日も過ごすようになった。

数日経って——時は熟した。

方違えの日となり、紀伊の守邸に行く言い訳がつくようになるこの日を、以前から待っていたのである。

急に、左大臣邸に退出するふりをしておいて、途中で思い出したように方違えのことを話題にだし、紀伊の守邸に向かったのだ。

紀伊の守は、前回以上に突然な源氏の訪問に驚いていたが、

「あの遣水の趣が気に入ってね」

という源氏の言葉に、単純に喜び、名誉この上ないことと、恐縮して礼を言上した。

源氏は、小君にだけには、昼間から、こうすることを約束済だった。

小君は最近では、終日、源氏のもとに側に仕えていたから、その晩、紀伊の守邸に着いてすぐに、源氏が小君を呼んでも、それを不思議に思うものはいなかった。

女のほうにも、源氏から今夜訪れるということは、小君に託した手紙で知らせてある。

——世間の目を欺くために、ここまで手の込んだことをして——。

——私のことを気づかって——嬉しい——。

——あの方のお気持ちが、浅からぬものだ、私にも分かる——。

しかし——。

——再びお逢いして、私のみすばらしい——淫らな姿を又も御見せすることになるなど——。

——あぢきない——。

——あの夜の夢のようにすぎた逢瀬に、悲しみを重ねてしまうだけ——。

女は一人、唇を噛む。

——あの方に逢いたい——。

——あの方に逢ってはならない——。

女は、人知れず心乱していた。

ここでこうしては、源氏の文に自分が応えているように思われて、恥ずかしい。

小君が、源氏のお召しで出掛けているあいだに、

「……世にも名高い光君が、自分の近くにおられるかと思うと恐れ多いことね。

朝から気分も悪いことだし、こっそり肩腰を叩いてもらいたいから、音を聞かれるのも恥ずかしいし……離れたところに」

——あの方の優しい御手の、届かぬところに——私が心迷わぬところに——。

そう嘘をついて、渡殿の女房の中将がいる局に隠れるようにして移った。

源氏は、もちろんそのような事は知らない。

何も知らずに、女に会えることに喜びを感じ、気分を高揚させていた。

供人たちに飲み会などもさせず、早く寝かせ、小君を側に呼んだ。

「これを、お前の姉上にお渡ししておくれ」

と、今から渡るよしを伝えるため、小君に文を託す。

が、伊予の若妻は局を移っているから、小君は姉を捜し出すことがなかなかできなかった。

用事が用事だけに、人に尋ねることもできない。

渡殿に入り込んで、やっとのことで捜し当て、姉のもとにたどり着いた。

自分の姉のこととはいえ、大人の事情が——大人の女の事情が理解できない小君は、伊予の若妻のやり様が、ただただ酷いことのように思えた。

「文一つを届けるのにこんなに時間が掛かってしまうなんて、源氏は僕のことをどんなに役立たずとお思いでしょう」

小君は、泣きだしそうになるのを、必死に堪えている。

「こんな不埒なことに、子供があれこれと、自分の考えを持つものではないわ。

幼い子供がこういう手紙を取り次ぐことも、とてもいけないことだとされえいるのに」

と、姉として小君を叱りつけた。

「気分が悪いから、侍女たちをすぐ側において按摩させているの。

その旨を、あの方に申し上げて。

さあ、こんなところを、いまでは源氏のお側付きのあなたがうろうろしては、怪しむ人もでてくるから」

そう突っぱねてみせた。

それが——強がりであることを、女は自覚していた。

——もし——。

それが——無益なことだとは知っている。しかし、考えずにはいられない。

——もし——。

自分がこんな身分の決まった女でなかったならば——。

伊予の若妻などではなかったならば——。

亡くなった両親の思い出が残っている実家に、一人ひっそりと生きていたなら——。

たとえ、稀ではあっても、あの光君のお越しを待つことのできる、自由な自分であったのなら――。

あの方と、洒落た恋事もできていたに違いない――。

自分の欲望を偽って、自分を強いて――あの方の御心を見捨てるかのような態度をとっているのも、どんなにか身の程をわきまえぬ女とお思いのことだろう――。

自分で決めたことなのに――。

女は、胸を痛め、思い乱れていた。

とてもかくても――。

現実の今は――伊予の介のような老体の妻となってしまった自分の運命は――いふかひなき宿世のこと――。

このまま――無心な――常識のない、情のない女と光君に思われたまま――。

女は、再び、固く誓った。

「小君は、あの女と、どう段取りをつけるだろう」

小君にそれほどのことは期待していない。

こちらから、あの子を利用しておいて、それほどの無理は言えまい。

その幼さに不安がないわけではなかったが、これ以外の方法を思いつけない自分も不甲斐ない。

ただ臥して待つ以外になかった。

結局、小君が時間を掛けて戻ってきたものの、無駄に終わった旨を伝えてくる。

源氏の頼みを果たせなかったことで、目に涙を浮かべて源氏の前で申し訳なさそうに座っている小君を責めることもできない。

世にも珍しいほどの、あまりに気強い女の気持ちに、

「わが身がいやになってくるよ」

と漏らしてしまう。

そんな源氏の様子を、小君は気の毒に思え、一層恐縮していた。

源氏は、しばらくは一言も語らず、ひどく嘆息し、憂しなる様子でいたが、ただただこうして時間を過ごしていても仕方ない。

「この手紙だけを渡してきておくれ。

手紙を読むだけでも、とね。

ただ単に手紙を読むことなら、君の姉上もして下さるだろうしね」

といって、文を託した。

さっそく小君は、手紙を伊予の若妻に届けた。

小君が必死になって手紙を渡すので、女も邪険に小君を返すわけにはいかない。

「——帚木の心を知らでそのはらの
道にあやなくまどひぬるかな——

近づくと消えて見えなくなるという帚木のような、
つれない貴女の心が分からないで、
園原の道に、虚しく迷ってしまうがごとく、
貴女に逢おうとして無駄に終わってしまったようですね。

申し上げる言葉ありません」

と、新古今集や古今六帖にある、

「——園原や伏屋に生ふる帚木の
ありとは見えて逢はぬ君かな——。

園原や伏屋に生えるという帚木のように、
いるとはわかっているのに逢えない君よ——」

という坂上是則の歌に因って歌われていた。

これを読んで、女も、

「やはり——お怒りになっておられる——？」

と、さすがに当惑した。覚悟していたこととはいえ、やはり畏れ多い。

あれほど、つれない女のままでいようと決意したにもかかわらず、

「——数ならぬふせ屋におふる名の憂さに
あるにもあらず消ゆる帚木——

伏屋というわけではございませんが、
臥したように貧しい家に生えているということが、情けなく、
いたたまれず消えてしまうのが帚木なのです。

このようなしがない身の上の私では、

貴方様のような素晴らしい方とは余りにも不似合いで、

お逢いすることができないのです——」

女は返事を小君に渡した。

——言い訳がましい——未練がましい——。

そう思う。

でも——。

光君にお会いすることはできないけれど——。

——嫌われたくない——。

——でも、会えない——。

女は、自分の身勝手さを、このときばかりは許していた。

小君は、源氏の気の毒そうな様子を知っていることもあって、子供ながらに、なんとか二人の間を取り持とうと、眠たさも忘れて、行ったり来たりしている。

他の者が見れば、どんなに変に思うだろう——。

伊予の若妻は、それだけが気掛かりで、胸を痛めていた。

源氏は一人、文の返事を待っていた。

供人たちは既に寝入っていた。

——無駄なことだとは——分かっている——。

——こんなことをして——おもしろくもない思いを持ちつづけて——。

——私は、なにを求めているのだ——？

今までに知らぬ、あの女の、人とは違った心強さが依然と源氏の心から消えることなく、源氏をとらえてやまない。

——癪だよ——ほんと——。

自分は、大人になったのだろうか。

自分は、変わったのだろうか。

いままでに知らなかった自分が、表に出てきただけなのだろうか。

——そういう女だからこそ、魅かれるのか——。

そう思う一方で、結果的には、そんなふうになにに振り回されている自分が、心外で情けない。

小君が、伊予の若妻の若妻の返事をもって帰ってくる。

「——『数ならぬ』……か——」

女の返事に目を通し、女の決意と心の揺れを、源氏は正確に把握していた。

(どうにでもなれ——)

心のなかで呟き——それでも、諦めきれない自分を、源氏は不思議に思っていた。

「その、姉上が隠れている処に、私を連れていっておくれ」

源氏の頼みではあるが、

「ひどくむさ苦しい窮屈な部屋に閉じこもっていて、側付きの女房も大勢いるようですから、畏れ多いですよお」

と、さすがに小君も困惑して言った。

そんな小君の様子が、あの女を思い起こさせて、かわいらしい。

「それじゃ、せめて、お前だけでも私を冷たく見捨てないで——」

源氏は、小柄な小君を引き寄せて、そのまま覆いかぶさるように、横になる。

年若く、やさしい源氏の姿を、小君は素直に、有り難く、美しいと思ってくれている様子であるのが、あのつれない伊予の若妻よりも、かえって愛おしく思えるのだった。

私が、一番最初に源氏物語を「文章」で読んだとき、最初につまづいたのがこの「帚木」でした。

理由は簡単。

とにかく長い！ただただ長い！

しかも、正直、だらだら長い！(笑)

特に前半の、いわゆる「雨夜の品定め」。

物忌みで内裏に留まらなければならなくなった源氏のもとに、頭中将、馬の頭、藤式部が集まってきて、男四人でそれぞれの女性観や恋愛観を話し合うんですが……。

読む人によっては、

「どーでもいいことを、ぐだぐだと……」

というぐらいにしか感じない(笑)

後半に「空蟬の女」が現れるまでは、山らしい山がありませんから、わくわくドキドキ感もあまりなく。

古文の特徴でもあると思うんですが、いわゆる「、」ばかりで「。」がなく、読んでいて疲れること疲れること。

しかも基本的に会話劇になっていて、長台詞が延々と続くので、私にとっては間延びした感じに思えて、読んでいて堪えられませんでした。

源氏物語を、ここで挫折する人も多いんじゃないでしょうか。

でも、この「雨夜の品定め」が、後々の話の大きな前振りになっていき、結構重要だったりするわけで。

さらに、源氏たちの——というよりは、紫式部の女性観・恋愛観、または紫式部が、

「男ってのは、こんなふうを考えてるんでしょ？」

って肩をすくめながら鼻で笑っているのが見えるこの「帚木」は、しっかり読んでみるとすごく面白いものなのだと、最近ようやく感じるようになりました。

えー、「帚木」のふつう語訳ではありますが、お断りしておかないといけません。

本文中には、性的な描写を書き入れていくことになるんですが、原文には、そのような性的な表現は一切ありません！

注意して下さい。

すべて、私の妄想です(笑)

ただ、今回のふつう語訳では、あえて性的な表現を書き加えました。

もちろん、ただの「趣味」ではないですよ(-_-;

それもやはり源氏物語の「雰囲気」を知っていただきたいからです。

源氏物語の原文中には、いわゆる私たちが想像するような性描写はほとんど見られません。

ただただ本文を読んだだけでは、源氏が女の人の方所に行って、おしゃべりだけして帰った感じになってしまうんです(笑)。

平安時代の人たちにとっては、そんな描写をすること自体が「野暮」だったんじゃないでしょうか。

「なにを、当たり前のことを、わざわざ」

という感じで。

よく、源氏物語を批判する人の中に

「ただの官能小説だ」

とか言う人がいますが、たぶんそう言う人は源氏物語の原文を読んだことのない——「マンガで読む古典」とかで知識人ぶっているような人だと思います。

また、源氏物語が江戸時代などに発禁になったことを取り上げて（←ホントかどうか、知りませんが……）、

「倫理上よくないから」

みたいな書かれ方がされるときがありますが、それも少し見当違いだと思います。

江戸時代にはもう、そういう意味での「粋」さは無くなっています。

だからこそ「春画」などが出回るわけですから。

もちろんそれは、良い悪いの問題ではなく、ただたんに「性文化」が変質したからに過ぎませんが、少なくとも、江戸時代の人たちでも、あの原文を読んで卑猥だと思えるような想像力——いや、妄想力豊かな人は、ごく僅かだったのではないのでしょうか？

問題になったのは、源氏が「藤壺と」密通をしたことです。

帝の女御、しかも自分の義母にも当たる女性と通じてしまったんですから、江戸時代に主流であった儒学からは絶対に許されるものではありません。

そして何より、それによって、一介の臣下が「帝の父親」になってしまうのですから。

そこが問題になったんです。

性的な「倫理」ではなく、儒学的な、または政治的な「倫理」なんです。

現代人の私たちはなおさら、ただ出会っただけで、男女が結ばれてしまうような感覚とはほど遠いですし、それが理解できてしまうのも、それはそれで問題のような気が.....(笑)

ですから、稚拙な表現であることを承知の上で、また皆さんに不快な思いをさせることを覚悟の上で、「それ」と分かる表現を書き加えることにしましたので、ご了承下さい。

不快に感じた方は、飛ばして読んでいただければ、と思います.....。

本当に、申し訳ございません。

作家の林真理子さんが、ある対談本の中で、
「どうして紫式部は『空蝉の君』との話を最初に持ってきたのだろう」
という趣旨のことをおっしゃっていました。

今から物語が始まるという最初のエピソードで、普通なら主人公のいいところを見せるところが、なぜこんな「最低な」話を選んだのか、と(笑)

私も全く同感です。
はっきり言って、「帚木」や「空蝉」での源氏は、最低です(笑)。

源氏を好きになれない人は、まずここでつまづくんじゃないでしょうか。

感情移入できない人も多いでしょう。

男から見ても、平気で嘘をつきまくって女を手に入れてしまう源氏に、共感できる人の方が少ないでしょう。

後々もお話ししますが、作者である紫式部自身が、源氏のことを決して「最高の男」とは思っていなかったんじゃないか、と私自身は勘ぐったりしています。

「カッコいい男」であり「女にもてる男」であったとしても、その性格ははっきり言って悪い面が見えすぎる(笑)

そして、そんな源氏に、でも女性たちは惹かれてしまう。

そういうのを書きたかったんじゃないでしょうか。

男ってのは、こんなものなんだ、と。

そして、そんな源氏の中に「誰にも真似できない優しさ」や「一途さ」を見え隠れさせることで、ただの「やなやつ」だけでは終わらせず、女性たちにも、

「しょうがないかなあ」

って思わせてくれるような。

そして、そんな源氏に惹かれてしまう女ってのも、そんなもんなんだ、と。

そういう点でも源氏物語は、非常に面白いと思うんです。